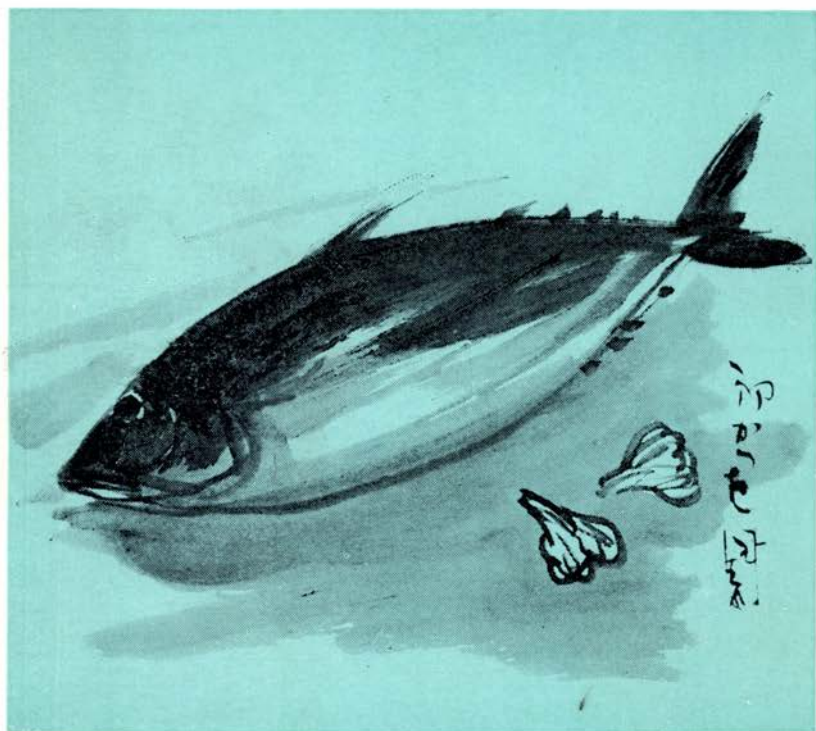


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
 昭和四十一年四月十五日 印刷  
 昭和四十一年五月二日発行 (毎月一日発行)  
 (第八号)



No. 8

五月号

# 元気1本

疲れたとき  
だるいとき  
仕事が終わった後

# ヘルタス バーモント

**P** 大日本製薬



さあ、  
健康をうたいましょう

立川澄人

## 大会 柳川忌路

柳川忌路  
柳川忌路  
柳川忌路

日時 昭和41年7月10日 (日) 午前10時開演  
会場 慶沢園 (旧住友別荘)  
大阪市天王寺公園内 美術館 横  
電話大阪一五〇七七一 (公園事務所内)

会費 入場券 (記念品贈呈)

第一部 「一周年祭典」 (同会場において 午前10時)

休憩 30分

第二部 「川柳大会」 (正午3時)

挨拶 麻生アイト

同 中島生々庵

追憶談 堀江塊人他

兼題 「一徹」 近江砂人

「天井」 相元敏夫

「雲」 川上三太郎

「髭」 麻生蔵乃

★席題 四題 当日12時30分締切厳守  
(兼題投句締切・六月二十日着まで)

(兼、贈題ともし句以内)

第三部 「野外パーティ」 (模擬店等)  
(同会場庭園に於いて)

費 八百円

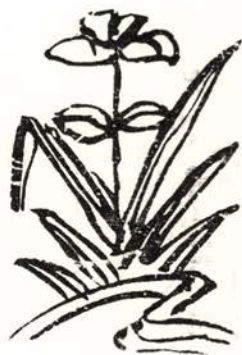
★投句先 大阪市南区醍谷仲之町二〇

川柳塔社内

路郎忌川柳大会係

# 今月のことば

## 中島生々庵



◎三月上旬大阪で「真贋展」というのが芸術新潮の主催でもたれた。

◎私のような全くの素人は、真と贋の間の接近巧妙さに驚く前に、真と贋の鑑別をするためには沢山の専門家の努力がたえず投入されていることに今更驚いたわけである。

◎「日本の美術を全体的に理解するためには鑑賞の歴史も、さらには贋作の歴史すらも知っておかねばならない理由はここにある」と日本に於ける美術鑑賞の歴史の変遷を解説されていたが、最近の記憶からだけでも儲けるためなら裁判沙汰やら罰金はおろか実刑でも覚悟の上で暗躍する例も少くない。こんな大混雑のむんむんする会場の中で観ていても妙に冷たい風が私の胸を吹きぬけるのである。

◎選句者として投句の選をする場合、頭どころかにこの問題に似たような感じがちらりと閃めく事はないだろうか。

◎十年ばかり前、三太郎さんが書いていられたのを思いだす。「江戸時代の有名な句を投句し敢然として私の眼を通過しよう」と心がける人がある。笑止千万な話である。それよりも私の古い句を選者である私のところに投じてくる人がある。これには驚いたが然しこの人たちは決して盗句しているのではないと思う。ただなんとなくいつか覚えてしまった十七文字をふらふらと投句してしまうのである。他人の手から私のところに戻ってくる――むしろ本懐と言わねばならぬ」と皮肉っている。

川柳塔五月号

# 川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば

中島生々庵 (1)

## ★川柳 110 番

(18)

——同人特集—— 服部十九平・早川清生・正本水客・橘高薫風

「諷詩人」同人作品 (特別寄稿)

石原青龍刀 (18)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

生駒から鰻谷へ

麻生葭乃 (17)

米人の英詩川柳

阿部佐保蘭 (28)

秀句鑑賞 (前月号から)

後藤梅志 (38)

川柳初篇研究 (三十五)

(26)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・

川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

歡喜仏と阿片 (大陸放浪) 東野大八 (42)



|              |        |      |
|--------------|--------|------|
| このごろのことば     | 戸田古方   | (29) |
| きのうきょう       | 本多柳志   | (41) |
| 三月号と私        | 唐崎專翁   | (57) |
| 明治川柳と風俗      | 奥津啓一朗  | (47) |
| 雅号ぶつちやけばなし   | 長野井蛙   | (40) |
|              | 小西無鬼   | (51) |
| 編集 1 1 0 番   | 不二田一三夫 | (25) |
| 近作 柳樽        | 北川春巢選  | (32) |
| 大萬川柳「耳」 入選発表 | 清水白柳選  | (50) |
| 金泥集          | 麻生葭乃選  | (31) |
| 作句教室         | 清水白柳   | (44) |
| ★柳界展望        | (薰風)   | (52) |
| ★本社四月句会      | (庸佑)   | (54) |
| ★各地柳壇        | (文秋)   | (58) |
| 一路集          | 山田季賛選  | (48) |
| 「靴べら」        | 中島小石選  | (49) |
| 「注射」         | 長野文庫選  | (64) |
| 「交際」         |        |      |

★編集後記

白柳・三夫



中島生々庵選

老妻の入院

老妻に石切さんへつかわされ

迷信に違い無かるが丙午

会う度に膝叩かせる物を言い

名が口に出ぬまま瞼にうかぶ顔

欠伸したひとりへ義理を立てて寝る

来なければ散るぞ散るぞと山の花

大阪市 石倉旅風

宇部市 平田実男

信用を落さなかつた損を賞め

以外にも極秘が無口からもれる

札束で押せば裏門スーと開き

はつたりヘサクラ飛びつくように買い

秀才が一人兄弟からはずれ

かりそめの陽ざしにあらす猫柳

五分咲の梅をバツクに畑仕事

矢印を小さく書いてはやる易

スタミナのつづく限りの麻雀さ

ストライクだわとお見合帰つて来

高槻市 傍島静馬

天皇は記念の手植に慣れたまい

不合格まだ神様と縁切れず

染め替えて妹へまわす子沢山

口ぐせのぶつちやけ話たこになり

巧芸画床に掛けてる三代目

新居浜市 安藤桂仙

返り咲く氣持流行歌を覚え

ふと金の奴隷と思う日の淋し

おおように育ちラツシユを立ち続け

合併へ氏神様はそつぽ向き

染める程あればと思う髪を撫で

大阪市 正 本 水 客

大阪市 橋 高 薫 風

団地の干すは箱寿司のよう

子と握手今日は春立つ日なりけり

山陰旅行

大國主命の国の春の雲

杉本胡人君結婚

雪嶺と木爪一輪のすがしき日

嘘をつく人間ばかりしやれこうべ

下関市 国 弘 半 休

広告のうそ字みんなも読んで居た

オシヤベリの口を封じる無口な子

還暦の白髪に余す黒い髪

手を上げて横切る僕へ道があき

奈良県 麻 生 ア ー ト

意見して結局エレキ購うてやり

雲すでに遠く四十九日すぎ

サボテンの針一つずつ神秘

蓮華草既に古典と云う姿

贗作の画面のきずもそれらしく

手拭いつぽん舞台を男にし女にし

釘のさびついてるタオルわびしけれ

飛行機でゆくよと電話笑ろている

宝塚市 小 畠 無 聖

風呂あふれ魚はこげて妻は亡く

戎橋心斉はしと春ムード

ブラジルの汗のコーヒをジャズで飲み

うとうとと車中に自己をとり戻し

出雲市 尼 緑 之 助

春となる雨 雨垂れの音で夜

まだ何か音がしている田舎町

久しぶり旧家の木戸に梅が咲き

あいさつもなくよろこびもかなしみも

大阪市 後 藤 梅 志

おち椿しつとりとした風の径

自画像

折れることすらままならぬ愚か者

高崎元陸軍中将逝く

九十四の天寿もろみの好きなひと

猫柳墓地のまわりは春の風

豊中市 戸田古方

信号燈が狂つておつたではすまず

とにかくも顔を見たがるエゴイズム

おくつうになつていながらあせつて

春近し春には春の雨が降り

岡山市 服部十九平

勤勉な早出を止めた非常線

恩給があると後妻をすすめられ

罰金ですんだと弁護士恩にきせ

厳肅な事実父なし子が生れ

大阪市 水谷竹莊

しもやけの指を彼氏にいたわられ

ホステスはカモの名刺をためている

一目惚れしたバスガイドほめちぎり

飛行機事故

見納めの富士になるとは誰れ知らず

見島市 本田恵二朗

ご亭主に言うに言われぬ株の損

カルテには口とは違うことを書き

交番の親切笑顔で地図を指し

胎の児へアンデルセンを読み聞かせ

青森県 木村涼人

枝剪ればりんどかすかに春息吹く  
現実には現実として俺も老い

妹急死

意地張つて出てサツポロの風に折れ  
もう責めはしないよ遺骨しかと抱く

倉吉市 奥谷弘朗

特大のヒップで妻の座を守り

儲かれば迷惑なんて云うとれず

見当でものを言うのが玉にきず

無理をしたらしいダブルがよく似合い

高槻市 若柳潮花

稽古場を出たら師匠の裏話し

ひとを恋うしよさのなかなる結び文

うたた寝へかけた揚羽の紋が粋

すねている肩を舞台の灯に落し

大阪市 本多柳志

祝賀会腹とは違う手をにぎり

晩年の運を官舎で待ちつづけ

国訛り失意の耳にあたたかし

テコ入れの条件として社を追われ

大阪市 児島与呂志

春近く風邪ひき直すお人好し



好き嫌い末つ子だけがまだ続き

カタログが何処で聞くのか二女に来る

洗濯機年期つとめた音で廻い

神戸市 仲 どんたく

死火山となつて女房もう妬かず

七回忌仏へひまご見せに来る

飯焚いてくれてるだけの夫婦にて

入学金掛け捨てにする果報者

愛媛県 渡 辺 曉 童

臥床旬日

病床で立つ茶柱を何と見よ

これだけが浮世の仕上げでは死ねず

枕頭で酒のむ見舞こそうれし

直つたら一番先のことが金

兵庫県 大 江 秋 月

成長株の方へ盃寄つてくる

雨男のあだ名で今日も雨に濡れ

国鉄の値上げ故郷が遠くなり

入れ智慧をしたか示談が強くなり

大阪府 西 出 一 栄

奥さんの趣味がおしゃれな夫にし

体重を貫目に直してギョツとする

寒風に石焼き芋の順を待ち

情熱のありつた夕日空を染め

岡山県 藤 原 秋 月

読めもせぬカルテへ覗きこんで聞き

マニキュアの手で女医さんが腹をなぜ

嘘までも見ぬかれそんな心電図

うれしい日に書けば似顔絵も笑い

鳥取県 清 水 一 保

不景気にかかわりもなく桜咲き

経済に余ゆうが出来て世を憂い

選挙戦を終えて

善戦を肩をたたいて賛え合い

公約の重さも意識する門出

芦屋市 丸 川 初 甫

末つ子の慾半分が気に入らず

ナイロンの膝丸出して茶の稽古

腹の底までは云わないインタビュ―

花道検定試験を受けて

花鉢もう減点をおどかされ

鳥取県 田 中 蛙 眠 子

検 診

心電図俺の心に似てとがり

秘境探胃カメラ遠慮なく歩き  
一年の任期だが名刺刷りかえる  
両輪は妻の方だけよう廻り

加賀市

那谷光郎

白髯を落すが惜しい守衛で居  
道義批判パパは古いとみななじり  
汚職記事昨日も祝辞読んだ人  
君も禁酒か寂しい二人の久し振り

新居浜市

小林孝正

灯一つを守つて今日も疲れきる  
砂が洩るようにしあわせ指を洩れ  
進学も決り近所の児と野球  
こんな晴れた日を内勤の袖カパー

京都市

松川杜的

結婚二十年妻のいびきも堂に入り  
合せ鏡も思春期と云う手付  
駅名を逆さに読んでひまな旅  
定年がそこまで来てる花便り

下関市

桜川不水

千鳥足急所はうまくよけてゆき  
血圧と滋養をマツチさすなやみ  
荆妻に謝する日のあり腰を揉む

引き抜いて捨てた大根に花がつき

伊丹市

小川静観堂

ゆき詰つた人生自殺の途があき  
猫といつしよに高い屋根で寝てみたし  
美しい心中つまり金の縁  
実家ではもう出来そうなのと決め

香川県

三井酔夢

口笛を吹けど返らぬ犬を恋う  
クラクシヨンエリート意識ある響き  
燃えるもの失いパンに生きて憂し  
淋しさに馴れていますとあまのじやく

大阪府

早川清生

ひとりの家に帰り電灯みんなつける  
孵らない卵抱いてるトキに似て  
民族が減び神殿だけ遺る

尼崎市

長谷川三司

思い出の浴衣を出して見たものの  
どぶろくの味を忘れた資本論  
レジャーブーム浮気の虫もチツトあり

倉敷市

田垣方大

希望ある時の歩調はよくそろい  
春の日をきよろきよろきよろと職がなし

手も握らず心をつかんでいった人

大阪府 西 いわを

憑きものが落ちた思いで握手され

ハンカチも疲れて来たよ洗濯機

お見合の話でいかにも春らしく

岡山県 浜田 久米雄

たくらみのある横顔が隅にいる

春が来るのを盆栽も待つていた

T君結婚

信頼の瞳見交わす門出の日

ハワイ 羽佐間 柳葉

歯科通いああ定年は近づけり

意地張りが通る間は脈があり

ゴシツプも派手に持ちよる港町

岡山県 直原 七面山

相性を信じる母を持て余し

推量で読む掛軸の字が綺麗

嫁ぐ娘の欲フライパンまで持つて

岡山県 横山 一声

モーニング買えないままで娘は嫁ぎ

娘は晴着親は借着で式がすみ

スト続行中学資おくれと子の便り

今治市 長野 文庫

押して見て引いて見て留守諦める

そう云えばそうともとれるサインの字

銀行に勤めゼロの字書きなれる

富田林市 岩田 美代

バスガイド車窓の首を左右させ

南国の旅情アバンチュールも味覚する

小原節共に唱つてバスが着き

加賀市 細呂木 魯木

定年の今日老妻も少し飲み

親の恩師の恩意識するつらさ

秀才のプライドが本を飾りたて

倉敷市 木村 千容

入試の日指折りながらよく遊び

午前二時猫はふらりと戻りけり

老僕森山君八十一才で死去

高德院一生小使さんでした

倉敷市 野田 素身郎

大袈裟になつて噂がかえつてき

夫婦喧嘩の呼吸ととのえ受話器とり

やめたるかと何度か思うた勤続賞

門真市 福島 鉄児

肩の荷を一つおろして二男二女

愚痴でない話だんだん愚痴になり  
君だけを信じて話す夫婦愛

小松市 馬場魚山

枯草を除けばつくし春を待ち

義経へ試験勉強降りて来る

お菓子から甘さが抜けている値上げ

ハワイ 築山快夢起

精進日隣家の猫もよりつかず

痛ましや眉間に疵の猫の恋

猿マタと云えば娘は可笑しがり

青森市 工藤甲吉

ふるさとへ山よ川よと帰つて来

オバQのファンとなつて孫という

日本に天皇だけのアクセント

大阪市 川口弘生

立話すめば帯が動き出し

勝ちすぎた痛快さには悔残り

絶景に妻を連れざることを悔い

大阪市 本庄金三

テコ入れに尻端し折つたご隠居さん

牛乳屋二日分入れ休みにし

一升燗斜に眺めいける口

大阪市 木村水洞

熊野旅

大正と明治が語る道成寺

那智の滝無料の場所です拝観し

シーズンオフ一人客ももてなされ

竹原市 杉原愛鳩

二十年遂に貴方と云いそびれ

片チンの下駄で花嫁見に走り

三度目は税務署お茶を出してくれ

笠岡市 木山遠二

茶をいれたよと書斎から妻を呼び

癌と云う噂が嘘でまめになり

同権はよろし女房の肩をもみ

玉野市 小谷仙山

水取があつけなくすむ暖さ

ただ立つていても地蔵に春が来る

お似合の夫婦どちらも意地張り

大阪市 山川阿茶

くくられて自由は鎖の長さだけ

引導鐘後生を願う年となり

けだものと云われる男から見た女

松江市 柳 楽 鶴 丸

値踏してカレーライスを食う女房

出世した友桂馬のように飛び

さようなら信じておれば歯切よく

松江市 小林 孤 呂 二

友情に貸し借りがあり腹立つ日

割りかんを貰うに女事務使い

分譲地安いところは北に向き

高砂市 吉 原 紅 月

豚饅のような娘やなと思ひ

春雷の音へ女の気が変り

総入歯もぐもぐ桜餅が好き

大阪市 河 井 庸 佑

持つてないように見えてる方が出し

このつぎは相棒の顔きく店にかえ

下馬評と違う異動さわがれる

美禰市 安 平 次 弘 道

雨近し気笛が山を越えて来る

喉元過ぎれば株屋だけが強気

コマーシャルうるさがられておぼえられ

大阪府 谷 沢 好 祐

大阪の夜とは縁のない給料

参考にならぬ意見を妻に聞き

たまのネクタイへ女房の目が光り

京都市 都 倉 求 女

春の風何でも嬉しい音にする

スーパを男大きな包みで出

一人降り一人が乗れぬ満員車

今治市 越 智 一 水

草の芽が児の小便を跳ね返し

ニコンは女であつた頬かむり

日曜をさけて花見へ母をつれ

小松市 関 戸 宗 太 郎

気の弱い男へ車掌席を空け

美術価値少々あつて邪魔な壺

現実には厳し幼稚園からすべり

岡山市 浜 野 奇 童

くたびれた背広が労組委員長

盛装でマダム借金とりにくる

親ゆずりですわと愚妻笑うだけ

新居浜市 近 藤 凡 生

千切雲スイスイと消え恋つもの

いささかの自尊心あり靴みがく

算盤を弾いて恋の阿呆らしさ



堺市 吉田圭井堂

剝けてるとも知らずはつたりまだつづけ

信仰の面かと大仏わらつて

さからわぬから放つとらかしと思ひ

大阪市 金井文秋

根性もないのに夢はデラックス

働けはたらけと借金のむちが追う

けちでよし気がよくてよし皆わが子

芦屋市 松下たつみ

世馴れした口に怒りを外される

雑談になつてから出たい意見

また明日お会いしますとふり向かず

枚方市 宮川珠笑

失業に百円亭主羨まれ

改札も僕も気づかぬ定期切れ

披露宴の食欲新婦撮される

大阪市 福井野迷路

流行とは云え膝上二十センチ

大声のワツハツハ空虚なるものよ

君お前あなた貴殿で民主々義

児島市 伊丹阿喜良

恩給も年金もなく土に生き

尋問へ浮気がばれる黙秘権  
まだ十年ある銀婚のプランなど

堺市 高崎雄声

さもあらん金持おカネを可愛がり

咽喉の奥見せて女も味気なし

おべつかも巧く使えば喜ばれ

京都市 大鶴喜由

空中分解富士の気嫌に触れたよう

そのケチを見込んで嫁に来て貰い

若者よ今日を遊べと唄が言う

大阪市 今西章雅

コンパクトそそくさしまう待ち呆け

愛情のしるし夫は虚勢張り

ほほえまし縁ある順と子沢山

岡山市 江国幽谷

大木がこんなところに根を伸ばし

のみのあと独りで撫でてうれしがり

春の木の芽にひからびている蛙

下関市 原千里

寝るだけに帰る下宿の隙間風

鍵かけず隣に上り話す妻

海底をさまよう遺体寒むかろう

出雲市 原 独 仙

たかが補佐新入社員へ反り返えり

寝酒より睡眠薬を飲めと妻

春雨へ不首尾を濡れて味気なく

京都市 室井八九寸

早出蜂遅れ追儼の鬼を追

おしつこをさせてもらうにある順序

専務僕です手拭腰につり

大阪市 中川滋雀

腹立てた辞表は一氣に書いたらし

正直に申告したら呼び出され

手許だけ輝らす灯りに占われ

芦屋市 唐崎専翁

人間の意欲生きぬく外になし

人生は唯物弁証金の鍵

靈魂の不滅信じてみたい齡

岡山县 大森娛句楽

子の心理つかんで遊ぶ孫の守

後世に動かぬ土台石を据え

子の為に命ちちめる願をかけ

防府市 長野井蛙

石橋を叩いている間に追い越され

正直も鍵を任せば気が変り  
越境をなじる隣りの花鉢

岡山县 田村藤波

辞表まだ出せず左遷の月に泣く

嫁の荷を見せたい障子開け放し

手ぐすねをひいて茶店が花を待ち

堺市 富岡淡舟

心残りなく辞められる二男あり

年金の暮しも乙なものを知る

凡人の勤めであつたのを悔いず

高槻市 山田季賛

妻の姓を継ぎ一家を無事支え

行き過ぎた電車おもむろに戻り

球根が水を頼りに春を待ち

出雲市 中川晃男

皺のある札から財布追い出され

エプロンで戴いて来るおすそ分け

母校からはるばる寄附に尋ねられ

平田市 久家代仕男

勝ちと踏む詰手鼻毛を抜く余裕

さんざ手を焼かした過去も立志伝

久々に茶室を開く梅日和

内職に五十銭と言う単位

奈良市 宮口笛生

ホルモンのけむりジャンジャン街ぬける

いいところ来たとはのみに行く話

加賀市 大山雅城

ストをして倒産させて失職し

図書館に勤め極めて無口者

この箱のたばこ無くなつて断つつもり

善通寺市 岡田彰男

去る者は去れ妻がいる子等がいる

此の子等が居てどん底に明日がある

事故ゼロへ犬も一旦停止する

大阪市 室谷鉄舟

利己主義が都市計画へ駄々をこね

奉加帳当り障らず書いておき

ええことがあるのか女よくしゃべり

西宮市 樋口舟遊

心無にして鳥居の朱をくぐる

ひのえ午だけに男子の内祝い

大阪市 大坂形水

長男の嫁に良い娘と乗り合せ

三面鏡少し猫背で老けた僕

竹原市 山内静水

角曲る息子とうとう手も振らず  
ご先祖を拜んで巢立つ子を信ず

呉市 林野甦光

そんな気もあつてか寡婦の髪が出来

さびしさを捨てる酒場の明る過ぎ

島根県 藤井明朗

思い出は妻若かりし奈良巡り

出しやばりの無口へみんな気味悪し

大阪市 宮尾あいき

老眼に鏡の顔は若くみえ

とにかくも今まで生きた有難さ

大阪市 宮地双楽

逃げかくれせんと啖呵の捨て科白

落ちたのを手をすけて待つ予備学校

大阪市 中島小石

六十年ひたむきに生きて誕生日

三人目全部お古はせつしような

兵庫県 遠山可住

今此処に置いた鉄へみんな起ち

もう退職める順番が来た表彰状

鳥取県 渡辺乱坊

四畳半暮らしの庭は山や川

せせらぎに引越しの朝を起こされる

八尾市 宇佐見彰大

行きつけの喫茶店あの娘がもういない  
逆境で夫婦円満見事です

三次市 和泉松風

世が平和宝くじも忘れ勝ち

スラムの子云いたい事は遠慮せず

岡山県 池田古心

人前はいらぬように云うて妬き

時代とは野菜の売れる田舎店

大阪府 高津徹也

木の芽風猫は昼寝の向きを変え

煉炭のまだなじみいる火鉢かな

京都府 西村句楽坊

極楽は生死忘却してゐるうち

もう我慢出来ぬかつこで仁王立ち

大阪市 天正千梢

すねかじりばかり集めてもうけてる

共稼ぎ今日はパパがしまい風呂

兵庫県 河原みのる

孫としみじみ恋を語るも時世なれ

時は金なりコマーシャルの一瞬よ

諫早市 川岡靈眼子

花供養言葉にならず海に投げ

長男大学進学

一人で行ける東京へ二人伴する入学

守口市 羽原静歩

南紀勝浦にて

潮騒のとどろく外に湯浴みして

箕面霊園にて

墓地と言わず霊園で地代上げ

大阪市 賀本昇

マニキュアのお洒落が姑の気に入らず

陳情へ哀願調と強気型

布施市 渋谷三時

寒釣りの不漁が集り焚火する

盛りあがる土は名も無い草の芽か

福岡県 太田湖平

幼稚園覚えた歌で肩叩く

肩叩き憶えた数を繰り返し

大阪市 不二田一三夫

しめつたマツチのように老詩人病み

ブルドッグはみんなオスのように見え

— 目 選 —

北川春巢

長女婚約、結婚

結納が届き大安だと気付き

誕生石ダイヤでなかった婚約す

仲人を訪ねて京の雨に濡れ  
閑静をほめれば山鳥も来る話  
婿殿に新京極をリードされ

西尾 栞

老梅の孤独を愛す涯つぶち  
老妻に手を貸す梅の怪でよし  
月ヶ瀬吉野長谷生駒仲居のスケジュール  
何事ぞ梅見るバスの長蛇かな  
探梅や橋を渡らん説と渡る説

若本多久志

行楽の春へ巡查は笛をふき  
何時返すとも書いてないむしん  
お間に合いましたかと恩を売り  
お彼岸は知らず連休のプラン樹ち  
買うとけば儲かりそうなハイキング

菊沢小松園

春の鐘歸りを急ぐ胸をつき  
許された紐の長さを匍い廻わり  
花の散る頃に臨時はやつと慣れ  
人間と暫し争う仁王の眼  
釈放のように退社のベル響く

中島生々庵

老夫婦内助の功がこそばゆい

向き合うたまま居眠つてる老夫婦  
嫉妬も慾も見栄もしなびて老夫婦  
気ままたも愚痴ともつかず老夫婦  
みの虫の夢に似た夢老夫婦

松江梅里

散りそめて花のいのちを惜しまれる  
異口同音だらだらと祝辞聞く  
気持ちだけ貰つておくこととわられ  
ころなき人に名所の枝が折れ  
悪名を遣し香煙絶間なく

清水白柳

しあわせは誰れにも騒がれない美貌  
ほめ言葉顔をそむけるように言う  
眼鏡はずすとチャーミングな女の児  
腕章で捌かれ花見幕にする  
労組の末端に居て信じない

川村好郎

四十年のご対面ぼんぼんと言うてくれ  
シヨツクかくすピースうつかり逆に喫い  
姑のような銀行へ逆わず  
ズクズクになつてタクシー集め役  
アイシヤドー近くで見るべき顔でなし



# 生駒から鰻谷へ

## 麻生霞乃

の私には関の山  
でございます。

こんな事ではあ  
れ程好きな踊り  
もラジオ体操の  
代りをつとめる  
事は出来ませ  
ん。とてもとても夏がすぎるまでは自由に  
外出は出来ないと思います。

川柳塔も号を追うて内容充実してゆきま  
すのでうれしく存じて居ります。先生のお  
骨折りを感謝いたします。川柳塔の皆さま  
は、どこまでも川柳を日常の糧として霊肉  
ともにすこやかな日々をおすごし遊ばさる  
ようお祈りしています。

昨年七月七日路郎が死去いたしました時  
川柳の縁につながれる私の永い生活もピリ

## 麻生霞乃

でございます。

雀の音節かきなり合うてその日暮る  
扇かざして立てば霞もとえはたえ  
生駒山へ攻めて来たよな大阪の灯が  
石垣へ隠れた蟹を誰が知る  
ゴーイング マイウェイ なやみなんかはこちや知らぬ

オドを打つ積りでおりました。或は今もそ  
う考えているのでございます。いつぞや重  
鈍さんが万代の家へお越し下され、

「たとえ一ページでも毎号川柳塔へ書い

て下さい。川柳でも詩でも何でもよいから  
」との事でした。私の愚作を発表せなくとも、立派に皆さん方の作品で立つてゆける  
のですから、堅く御辞退したかったのですが、眼のわるいのに仏前へわざわざお参り  
下さった重鈍さんのお姿を拝見しては、む  
げにもおことはにさからうことは出来ませ  
んでした。ハイハイとおひきうけた限り  
はたとえ半ページのスペースをふさぐもの  
でもと思い、短かいものを不二田さんのお  
手許まで送っていました。

中略一金泥集のことも一時は不二田さん  
へおことわりしたのを阿茶さんの御訪問で  
また逆もどりをした形でございます。兎に  
角川柳の世界から脱皮したい我儘な気持ち  
でいる私でございます。世の中の事は何も  
彼も見えないところへ行きたい私でござい  
ます。深い霞の中で瞑目していたい私なの  
でございます。これが今の私の心境なので

「その日暮しも軒に雀がこぼるるよ」  
の路郎の掛軸がかかっていました。これが  
私の生活の外貌なのでございます。

中島生々庵先生

お便りありがとうございます。私は相変ら  
ず、寝たり起きたりの毎日を過して居りま  
す。運動が足らぬので夜はほとんど朝まで  
眠れない時もございます。先日阿茶様がお  
訪ね下さいました時も、阿茶さんにむさく  
るしい部屋の炬燵へ這入って貰い、私は失  
礼し寝て床の上に座っておはなし致しま  
した。

別に内臓に故障があるわけではありませ  
んの、みつきは達者そうでありましても  
立ったり座ったりするたびに膝の関節がぎ  
くりぎりいたします。永い間座っていた  
日は縦の筋肉がかすかに痛みます。まだほ  
んものではございません。

それに白内障の診断を受けているのです  
から、なるだけ病状の進めよう眼科医の  
御厄介にもなっています。それで暫く読書  
も中止したく、私方へ送って下さっている  
俳句雑誌、柳誌などばつぱ御送本中止の  
お願いを出しています。

一丁程へだたった郵便局までの散歩が今

# 川 柳 1 1 0 番

なにかを訴えたい、こんな気持ちはだれにもあるものである。そこで同人4氏に、お気軽に書いてもらった。

ゲスト寄稿として「諷詩人」同人諸氏の最近作を石原青竜刀氏にご発表をねがった。

・特別寄稿・

## 「諷詩人」

— 同人作品抄 —

竹の国

佐藤冬児

民族の富士あかあかとエンタープライズの地上

赤字国債がおどるベトナムの返り血

血は核よりも強い ベトナムは竹の国

アメリカライオンの骨を拾う首のない牛

北爆再開 ミサイル抱いて二号の乳液

ベトナム特需でくさったリンゴの涙

植民者の落し子のヒゲが上を向く

黄金海岸の「モノカルチユア」にからみつくCIA

ビキニ模様

室町太郎

「クーデター権」を与えよ自衛隊に「戦力」は要らない

ガンコが資格 国鉄総裁と大学総長

アメリカ特売の核のカサですビキニ模様

石焼芋一個三十円尊徳も食うのをやめた  
アメリカへオパQどもの拍手国会閉幕  
原潜と乱交 日本ムスメの春の耻部  
純潔な宇宙 冥王星の向うに逃げ  
帝国主義的競争ロケットへ金星の黙香権  
インスタントラーメンですくすく育つ天皇はなくとも

## 天下のピエロ

岡田一と

「東京はどうかしている、核の傘さして  
西風がつくった気流に落とされる  
タケルも吞まれる水割り過ぎの現代神話

爪先立のどんぐりに腰曲げてる

平和を透視したら爆弾が嗤っていた

サラブレットを気どる天下のピエロ

電子頭脳も塩加減でうごく

紙きれに抗議空しく拿捕される

自由長屋の惣雪隠 フジヤマのついたて

ドルのつかくしから出た安保荊冠のとげ

## 歯 ぎ し り

一 叩 人

詠進歌 耳ざわりのいい「声」を入れ

女犯は菊の合弁花にある

つんぼ馬 西風だけにそばだてる

歯ぎしりを「和平」と聞かせる米帝の義歯

女神西に向いて東に羅刹の北爆

「あなたのお好きな憲法」のユーモアでピストル

国債買いましよ屑籠をあげます

選挙区をきざんで陣笠に書く「改憲」

アトムにキッス ビキニスタイルの出べそ

## 二十一世紀

石原青龍刀

なんと埃リッぽい月宮殿だ

日本から月へのみやげは千羽鶴

二十一世紀も大島は椿で食う

ビルとスモッグの合作太陽の熱も光も奪る

生くるしるしふおとこにタレント時代

ジャリタレ月にうたわせて二十一世紀の左閉扇

クンがミソなら代議士さまのPRソング

東京に青い空が見たい二十一世紀のビジョン

スカルノ・エンクルマ くすぐったい雲煙過眼

核のカサかぶりひよろひよろスモッグを泳ぐ

ケラの夢モグラの食生活革命成る

猿の商魂眼つむって糞の壁を塗る  
暁けの明星 輩 考えを天に預け

## 柳論を持つと

## 服部十九平

26万部突破ノ大ベストセラノ日本中に巻き起す大反響、感激の手紙連日殺到!!というセンセーショナルな新聞広告にひかれて、扇谷正造編「私をささえた一言」をひもといた。

おれに似ろ、おれに似るなと子を思い、という標題が目をはいた、一字違つてはいるが、まさしく路郎師の句であるこれを「私をささえた一言」にしているのは児童文学者国分一太郎氏である、私は未知の国分氏に親しみを覚えたのであるが、その本文を読むに及んで、私の親しみは失望と慨歎におちてしまった、国分氏は書いている。「だれがつくったことばかわからないけれども、日本のそちらこちらに、昔から残っている好きな言葉としてはこのことばをあげたいと思う」政治家や実業家ならいざしらず、いやしくも文学者である国分氏が、この名句を「たれがつくったかわからない言葉」にしてしまっているのである、川柳を知らない文学者・私は淋しくなった。

併し考えてみると、こうした事例は沢山ある、そこで私は「川柳」というものに、なにか訴えるに当って、先ず自ら反省して、川柳の姿勢なり、川柳家の心構えに強い規正が必要だと思ふ。

いったい川柳とは何か・川柳は詩なのか非詩なのか、川柳と俳句の区別はどうつけられるか、前衛、革新、伝統、本格などと格づけしたが、その意味するものは何か、

川柳家は文学者として川柳へ精進すべきであり、あそびの川柳、実益への川柳利用等は川柳家の恥であり川柳の冒瀆である、等々、問題は沢山ある、これらの問題は頂上会談の論客によって論ぜられ、時には活潑な論戦によって柳界に寄与し、時には興味本位の弥次馬を喜ばしているが、また一方これからの問題は、川柳の初心者もある程度になると誰しも考えさせられ、疑問を抱くものである。

そこで私は思う、川柳の本質論なり川柳作家の在り方の問題は、夫々の認識の程度、それぞれの好み（むずかしく言えば先天的傾向）によって異ってくる、みんなの言うことを一々深刻に聞いていると何が何だか分らなくなる。例えば昨年八月からはじまった「せんば」の「川柳縦横談」など真剣に味読すればするほど分らなくなり統一見解としての結論なんか求むべくもない、要するに論旨相違の誤を見せつけられ、結局、各人は各人で自分としてのものを持たねばならぬと痛切に示唆されるのである。

であるから私は私に言いきかせ、問われる人あればその人へも次のように話すのである。「兎も角、借りものでもいいから、自分としての柳論を持って、その柳論は自分の成長によって変わって行ってもいい、最初から金科玉条として信倚し、一生それに則して川柳する最初から金科玉条として信倚して得られないことである」と。

議論は批評家にまかせ、作家は一途にいい川柳を作ることに精進すればいい、区々たる論争ではなく、実作で勝負すべきであるというのが、議論に弱いものの隠れ裏であるが、それはそれでいいとしてもその柳論の一席も弁じられなくとも困る、借りものでもいい自分としての柳論を持つべきである。

柳人雉子郎が若き日の吉川英治であったことや、白井喬二が若い頃川柳を作っていたことを川柳にとって光栄でもあるかの如く言う向もあるが、大衆文学の大家に川柳を



やった過去があることと有頂天になって喜ぶが如きは、自ら文学としての川柳にコンプレックスを感じている証拠であって、国分氏の如き文学者があるのも当然だという逆説も成り立つ、また分る川柳ということがよく言われるが、私はこのことについて堀口塊人氏の言「私は、私自身の作品が難解と評せられることを少しも気にしてはいない、伝統川柳のようなやさしい顔をしているが、中味には前衛以上のむずかしいものを持っていると自認している」に満腔の共鳴と敬意を表するものである。この自信こそ尊い。私には勿論そんな自信はない、右顧左弁借りものの柳論で、うろちよろししている私ではあるが、編集者が、この文中に自作数句を挿入せよとの注文があるので、わかる川柳に関連して二三、自句に説明を加えよう。

ひき蛙蹴られたことが腑に落ちず

終戦後公職追放令によりページにあったときの体験である。

銀婚の妻トーストパンに似て

川維二五年八月号の合評で山雨楼、伍健さんからは褒められたが、某氏の「狐色に焦げた具合、年はとつてもリン気は抜けぬか阿々」は作意とは全く違う。

金魚鉢キレイな順に死んでゆき

金魚の死に寓意したことは勿論だが、ミス准ミスが相次いで亡くなったときの時事吟である。

## 伝統の新しい展開を

早川 清生

旧約聖書の創世記にバベルの塔の物語がある。ご承知で

もあらうが、急速にふえたノアの子孫どもは故郷を出て東へ移り、町と塔を建ててその頂を天に届かせようとした。しかし神はその思いあがった計画を無為に帰し、彼らの傲慢を打ち砕くため、言語を乱して互に意思が通じないようにしたので、人間たちは塔の上と下とで空しく喚び合い、塔はついに崩壊して人間たちも全地方へ散りみだれたという。この寓話を宇宙時代の米ソの対立になぞらえてもよいが、私たちの周囲に置き代えて、文芸一般における伝統派と前衛派の、意思の疎通を欠いた、相互不信の状態だとみることができよう。

その点川柳における前衛派の人たちはたいへん行き届いていて、私たちは折にふれてその主張を聞くことができる。私たちは私たちはこそ川柳の正統を継ぐものであり、現代の詩に値する新しい伝統を築いていくものだという自負をもつが、前衛派または革新派といわれる人たちから、私たちが当然として見逃し、あるいは不勉強にも探求を怠ってきた事柄を指摘され、研究の成果を知らされることが多い。私たちの仲間には、古い経営者が労働組合に対するように、前衛について生理的な嫌悪を示し、あるいはいわれなき敗北感を覚えるものもあるが、ここで前衛派の意見を聞いてみよう。なお現代川柳という言葉は、混同を避けるため固有名詞以外には使わないこととした。

著作としては少し古いかもしれないが、基本的な考え方に変わりがあるう筈がないので河野春三氏の「現代川柳への理解」から前衛派の立場を抄出すると、

一、現代人としての意識に目覚め、現代人の手で、現代人の感覚によって川柳を作って行くこと。

一、川柳を非詩の立場でなく、短詩ジャンルの一分野として確立して行くこと。

一、根底に批判精神をもつこと。  
一、内容の自由性を欲求すること。



一、日記川柳・報告川柳・綴り方川柳の名で呼ばれるトリヴィアリズムを排撃すること。

一、必ずしも五七五の一定のリズムでなしに、自分の内部要求に即応した短詩のリズムを見出してゆくこと

一、作句の上にイメージを尊重すること。

とあって、実践面ではともかく、これらの項目は私たちが従来から主張してきたことと根本的に何等変らないもので、たとえ解説書的な平易さで記述されているとしても、私たちが伝統を守る者が当然今後の展開の中で処理してゆかねばならない事柄である。前衛とはもちろんアヴァン・ギャルドの謂であるが、これらは開拓の革命的なはげしさをもって美の未知の領域を表現しようとする思想というよりも、至極常識的な意見であって、むしろ今日このようなことを言われねばならない点が私たちの側にあるとすれば、その意識の低さこそ問題であろう。

さいわい私たちは川柳の旧套を墨守しようとするのではなく、常に現代に生きて、庶民の意識と詩的感覚を合一しようという立場にある。前述の諸項目のうち形式面では定型の問題が挙げられているが、私たちは決して定型を固執するものではなく、麻生路郎氏の晩年にも

化石の魚をわれと見し眼よ

疑いもなく 今夜も眠りにおちる

雲の峰という手もあり さらはさらばです

などかなり五七五形式にとらわれない句が残されており川柳雑誌の投句にも自由律形式のものを散見した。なお第一句は十四字詩などとも呼ばれて、従来でも必然性のある時には許容されていたのであり、非定型の句が川柳に氾濫しなかったのは、明快単純な理論によって、私たちが受け継いだ尊いものを軽率に捨て去ることはできないとする各自の信念と、選者が安直な態度で定型を乱すことを許さず、リズムやそれが内蔵するものなどへの慎重な考察なく

して、あるいは素材の整理ができずに非定型への妥協という形で処理することを排してきたままだと思っている。

この小文はパベルの塔が革新派の中にあるなどと、前衛的な考え方を批判しようとするものではなく、またそれだけのスペースも与えられていないが、前衛についてはまだ発想や表現や内容などのさまざまな点について考えねばならない点が残されている。ただ前衛の基底にある否定の精神が、川柳というジャンルを存しつつ、どう定着されてゆくに今後とも深甚な関心を持たざるを得ない半面、伝統の発展を希求する私たちが知性と凝縮性の稀薄な作品を大量に生産して自らを低くしている現状を謙虚に反省しなればならないと思うのである。川柳の社会化を提唱し、常に若々しい情熱を忘れずに、生命ある句を創れと絶叫した路郎氏を継承する私たちには大きな使命が托されているのであり、路郎を超えることこそ、未来を信じ、路郎の志を継ぐことであると信じている。

## 旅の眼

### 正本水客

人は何のために生きるのかということとは一番単純で素朴で、そして一番本質的なことであろう。それが、いかに生きるべきか、から、いかにして生きるべきかへ、本質論から方法論へと移行せざるを得ない御時勢である。

川柳は何のためにあるのか、何故川柳をつくるのか、を自問自答してみる。山がそこにあるから、を引合いに出すまでもなく、つくらずにいられないから作るというのが本

当であらう。幼い頃の眼にしたことを、すぐ喜びとし悲しみとして、唄にし動作にした表現本能が枝葉をのばして育ってきたものである。

「童心をもって真実を見つめる」これが私の川柳する態度である。何を見詰るかが大切なのであって、いかに表現するかは、次の次の問題である。本格だの前衛だのと眼に角をたてるのは、何か私にはむなし様な気がする。

戦後四、五年頃、西日本の国鉄人の機関誌として私達が出していた「大鉄川柳」紙上で山陰のH氏から、たたかれたことがある。水客さんの句は俳句の匂いがしてなりません。

これに川柳と銘うって眺めてもスッキリして美しいに決っています。川柳家の全部が貴方のような句ばかりを作り出したら、大変なことになるでしょう、日本から川柳というものが消えてしまいますから……という意味であつた。理屈のきらいな私も、まだ若かったのか、次号で反撥文を書いてゐる。川柳が人間及び自然を対象とした詩である以上、一個の川柳人として森羅万象のなかに川柳味を発見し、川柳意欲発露の下に一句を創作した以上、それが、いわゆる川柳味が稀薄であるからと言って、それが川柳でないとするのは当たらない。川柳家の全部が特に川柳味の少ない句のみを選んで、その様な句のみを真似て作りだすという様なことは、馬鹿げた盲想に過ぎない。川柳が各人の直感を導び、各人の個性を基とするものである以上、無批判な盲従をするものは、既に川柳人の資格を缺くものだからである。と、ダンピラを振りかざしているのも懐しい。その時分から、水客調なるものが顔を出していた訳である。

ノーハット広場の雨にさからわす

旅らしい音で柳に傘がふれ

紫香、潮花両君と共に出した句集「三人」の序文の中で

同じ旅の駅を詠んでも、豆秋さんなら犬が出てくるとかして、ユーモアに表現されるが、水客さんは俳人に近い感覚で川柳にまとめるというところでしょうと、霞乃先生が言っておられる。

路郎先生は、しかし、それが俳句にならず、立派に叙情詩としての川柳になるんだからな、異色作家の一人と言えらるだろう。とにかく水客君の句は旅の句において特にすぐれている、そして非常に静かに自然にふれていることも特徴といえよう。

だいたい以前の川柳に柳人の照介欄があつて、その趣味の処で、夕暮れのせまる未知の土地へ旅の足を踏み入れるのが、たまらなく好きであると書いたことがあるが、これで水客の旅好きも、句の上で両先生から認められたことになる。

絵画における色彩や線の組合せ、音楽における音響の組合せ、そのものの本質であるが、文学における文学は単なる符合に過ぎない。しかし、この言葉という独特な形式によって、絵画や音楽の情緒を表現することは出来ないだろうか。リズムを生命とする短詩型の川柳の領域で、*「旅をうたう句」*において、この望みを果してみたい。いつの間にか、このことが私の念願になっていた。

旅の景観を素直に捕えたものは、俳句に一步をゆずるとして、旅で得た情景、旅を主題としたものに取り組むべきであらう。

旅を正確に記した紀行文から、文章にすることの喜びを主とした貫之の「土佐日記」へ更に、歳月も旅、人生もまた旅と観じた芭蕉の「奥の細道」へと展がりを持っていったように。

お休みなさいと言うて女中の顔になり

旅に聞く気笛が旅を遠くする

逆さ富士 旅情の底にゆれている

## 手前味噌の弁

橘 高 薫 風

句会で「天の天」というのをやり出した。今までに無かったことだが、川維西成支部と明和研究会のグループの交流が活潑だった数年前、そのどちらかで、初めての試みとして始められたものだ。

その後、あちこちの句会でも行われるようになり、川維の本社句会でも路郎先生の選で、題詠の天位、数句の中から、特選の一句を抜き出して、「天の天」とし、路郎賞のカップが受与された。名選者で一世を風靡した路郎先生の選は確かで、「天の天」にふさわしい句を選出され、大いにわれわれを啓発することになったが、句会出席者全員で選出する「天の天」の句は、必ずしも一等の句にその榮譽が与えられるとは限らず、かえって第一等の句が落選する場合の方が多いのである。確実な選句眼によって、句会出席者を指導啓発することに、「天の天」の意義があるのであって、単に興味を添えるぐらいの意味で行われるのであれば、かえって害になるのではなからうか。選出前後のどちらかに短時間の斗論が欲しい。

☆

次に、これも句会、又は誌上句会などで、兼席題に天位を獲得した作家が、翌月の句会の選者に登場する制度のこ

とである。制度などと云うのは大袈裟だが、こういう習わしも又、甚だ危険なものではなからうか。川柳作句数カ月という新人にして、偶然天位を獲得すれば翌月先輩多数の句を句会の短時間のうちに謁し終え選をしなければならぬのである。どう考えても納得のゆく選が出来よう筈はない。

句会がいよいよ興味本位、人寄せ本位に陥してゆくのが目に見えて、これではいけないと思わずにはおれぬ。私は、その初心時代にあちこちの句会へよく出席をした時期があった。ある日「ふあうすと」本社句会の幹事の西田幸氏から席題の選を依頼されたことがあったが、私は、「私の属する川維の選者にまだ推薦されておらぬ未熟なものです。他社のまして本社句会の選を致すことは私の気持からしてお受けすることは出来ません。路郎先生から選者の推薦を得ましたら、喜んで選をお引受け致しますから、それまで私の我儘を通して下さい。」と辞退したことがある。依頼の幹事が、幸氏であって親しく口がきけたから、そういった率直な思いも云えて、気持よくお断りすることが出来たのだから、これは今にして、正しかったと思ひ出されるのである。

☆

川柳塔、近作柳樽の選が一本になり、総花的な選者名の羅列がなくなったことは、すっきりして良い。追々、新生「川柳塔」の句風も、対内対外的にはっきりうち出せることだろう。

亡き路郎先生の「川柳雑誌」時代には、句風も、対外的な処身の途も、厳し過ぎる程に厳しかった。その反動でやや伸び伸びし過ぎ、たるみがあらう方美人的顔付きになつていないかと反省してみる要がありそうだ。殊に作句の上で、死去されてまだ一年にもならぬ恩師路郎先生の眼をわれわれは常に感じておりたいものである。



☆

革新的な句を創る現代川柳のメンバーでは、蒼之助・哲郎・芳味・磨郎・新子の諸氏の句を畏敬の眼で見ている。茨の道だが、何時の日か高度の境地を拓いて私を驚倒させる作家が出ることだろう。皆、一人一人が独自の精進をして、少しずつ道を開拓している人達ばかりである。私のように路郎先生の指導に頼り切っていて、先生の死以来、抛り所を亡くしてしまふような弱虫は一人もいない。畏敬するのは、そのことと、常に勉強をしているということ。現代川柳の熱っぽい雰囲気は、伝統派に最も欲しいものの一つである。併しながら、革新派全体としては、てらいが多く、未熟であるような気がする。噴飯ものと極言したいような句も数多い。多くの伝統派の達観したぬるま湯的な作句態度も、多くの革新派の予猶の無さも短詩型文学川柳には致命的な欠陥に違いない。両者に調和した詩精神が欲しいと思う。

☆

私は伝統派の真只中にいる。小学生、中学生の時から和歌、俳句を読むのが好きで、万葉集の数多の長歌なども殆ど空んじたもので、秀歌、秀句の鑑賞に関する本は目につく限りむさばり読んだ。戦後の長期療養の期間にも、明治・大正・昭和の短歌、ホトトギス雑詠集などの文庫本に親しんで詩囊を豊かにするのに役立てた。短詩文芸作品に親しんでいる時が、他の読書をするよりも一番楽しい思いを味わえる故だった。根っから好きなのだろう。川柳を作句するのにも、この過去の土壌が必要なのではなからうか。観察力や表現力には個々の差があるが、重大な問題ではない。短詩文学共通の要事は、調和の精神である。そして、それは、誠実な謙虚なところから生まれてくるものと信じている。

火急を要せぬ手前味噌の弁を、川柳一一〇番へ。

## 編集 110 番

不二田一三夫

ここがいったので、また埋めることになった。いつもご執筆ねがっている方は、万に一つもこんなことはないが、どうかすると原稿に句読点のないのがある。マル(句点)や、点(読点)なしで五・六枚ギッシリつまっているのには、まったくのところお手上げで、これにはどうしようもない。

川柳には句読点をつけないから、ついそのクセが出るのだろうか、二千字からの文章を句読点なしで読むことはクイズである。また、句の上へ、一、と書いて、その下へ句を書く人が相当ある。これらの不要の字句は、印刷所へまわすとき、いちいち消していくのである。とにかく柳箋なり原稿用紙に書いてあるものは全部活字になるので、こちらもじゅうぶん注意をしているが、ときには失敗をやらすこともある。

文中の句をゴシックにしたとき、一句だけうっかり指定をしなかった。印刷所で気をきかしてゴシックにしてくれていたので、初校のとき、ゲラ刷りの隅つこへ、

「気を付けてもらってありがとう」

と謝意を表したら、再校のときわざわざ一行つめて、その文字を組んできた。句にルビをつけるのが多いようである。「姑」を「は」などと、別にルビはいらないのではないのか。柳社によっては全然ルビをつけないところもある。最近ばくもルビなしでわかる文字を使うように心がけている。いちばんありがたいのは、誌面のように書いていただくことである。それと締切日を守っていただくこと。

「一人おくれで大勢こまる」この標語は、雑誌発行にもあてはまるようである。



# 川傍柳 初篇研究

(三十五)

前田喜代人 川端柳風  
岡崎重義 故高須啞三味  
清博美丸 十府  
藤井和雄 岡田甫

400 おせきこちへ出て居やと苦勞そふ

泉河

藤井||「おせき」は何かの擬人名なのだろうか、不明なのでわからぬ。句からして身分のよい老人か病人が呼んでいる所と考えられるから、無理に解しておせきを咳嗽とすれば、勞咳の患者が苦勞そうに家人を呼んだ所か。

高須||「おせき」はもちろん「咳嗽」の擬人称。そっちは寒いからこちの日当たりへ出ておいで、というのだが、勞咳の娘はあまり明かい所へ出たがらない。下五の「苦勞そう」は、その娘を思いやる母の心情で、病人より、病人のいる家を詠んだ句とみたい。

前田||この句から来る感覚は「おせき」をせきをする女とれるが、「おせきさん

まあだまりなと面隣り」(傍初・33)から受ける句とは全く違ふ。作者も違ふが、抄出した句は「せきせきとせきこんでしゃべりする女」の擬人称とすると、矢張り、おしゃべりがひどいので「こちへ出て来や」と暗に、おしゃべりをとめずに、苦勞そうに目立たないようにとめるのではなからうか。

清||高須説に賛。病人が居ると、家の中は暗い。

勞咳に母はおどけて叱られる(初26)と冗談もいえない。だから、母親まで気がめいる。

丸||高須説賛。「苦勞そふ」は説明的だが母親の温かい心持がよく出ている句。

岡田||同じ。

401 破傘五六本あるするひ内 五鳥

藤井||雨降りに貸してくれる傘は惜しくない破れ傘ばかりだ。それでも律義な人は、濡れたまま傘を返すのがエチケットとされている。この男ずうずうしいとみえ借りっぱなしの傘が五六本もそのままにある。今も昔もありそうなこと。

川端||骨が入るぞへと傘かしてやり

(傍一23)

の気持ちちが理解できる。

高須||「するい内」は「狡猾な家」の意味で、五六本もある所をみると、この家の連中が、そろって横着なのであらう。

前田||ずるいのうちに、骨も売払わんとするこんたんがある。

清||「するい」は「狡猾」ではいき過ぎであらう。横着ぐらいのところ。

丸二賛。「骨を売払うこんたん」まで感じとることはなからう。

岡田二當時は「するい」をダラシノナイ意に用いている。例えば「瓢金福寿草」(嘉永二)に「前するい女拝殿のごとくなり、しまりがなくてじようがない」という狂歌がある。

名鍛冶の近所女のずるいこと(管一40)  
これは刀匠正宗のいた相模国のいわゆる相模女の句。いずれもダラシノナイ意。

402 労咳があるで淋しひ雛祭り 一甫

藤井二例により川柳では労咳とは若い者の結核プラス性的ノイローゼの症状で、いわゆるブラブラ病。この娘も行年十九才で、あたら死んでしまふかもしれない。華やかな雛壇を仰ぎながら病床の娘、娘も寂しからうが、まして寂しいのは娘の両親であらうか。

高須二三月は娘の節句。その娘が労咳ではにぎにぎしい雛祭はできない。「淋しい」が説明だが、この時分としては、感じのよく出たよい句とおもふ。

前田二平凡で常識的な句。他の短詩では「あるので淋しい」は最低の表現である。  
丸二賛。前の「おせき……」とい本句といひ労咳の句としては嫌味のない佳句だ。

岡田二同

403 から皮を半いさかいて亭主貰ひ 里弓

藤井二から皮は唐草で④虎の皮⑤オランダ舶来の紋形のある草とある(広辞苑)當時珍らしい舶来の革で作った装飾品か煙草入れではなからうか。丁度現在の細君がトカゲの皮やイミテーションではいや、本物の鱉の皮のハンドバッグが欲しいと亭主といさかいをしたのと同様ではなからうか。

川端二から皮は「辛皮」で山椒の実のことで、味が辛く毒消しになるので薬として用いられた。女房が辛味が嫌いで飲まないのを、半分叱るようにして亭主が買って飲ませるのであらう。

高須二そういう辛味は、女房の欲しがるものでなく、亭主だけの嗜好物だから、買う時には半分口争いをしたことであらう。

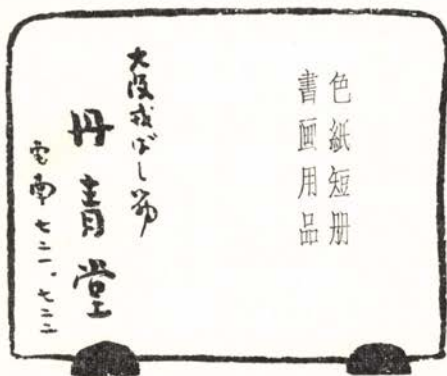
前田二辛皮の銭をぶつ／＼内儀出し(一九27)の類句がある。辛皮について川端氏は薬。高須氏は嗜好物とあるが、類句からみると、やはり高須説であらう。山椒の苦い樹皮を粉にし、塩漬にしておき食べる時に塩出しにし醤油をかける。句意は高須説に賛。

清二嗜好の違いだけで、半いさかいをするだらうか。納得しかねる。

丸二高須説賛。「半いさかい」は前田氏引用句を大袈裟に表現したもの。

たて引でからかわを喰ふ馬鹿な事(傍四32)もある。

岡田二今はわが国民も味覚の点では世界的になったが、江戸時代は料理も粗食で進歩していなかった。急激に料理が進んだのはこの句集以後の時代からである。そのためネギすら臭いといって食べなかった。辛皮なども同様。そのつもりでこの句を御覧にならぬと、夫婦喧嘩の原因もわからぬ。



# 米人の英詩川柳

阿部佐保蘭

北米の崎村白津氏より、この春川柳バラ誌上に發表された米人ホワイト氏の「酒」と題する英詩川柳を英訳川柳の参考にと送って来られた。ここに原句と小生の先ず魁より始めよの下手な意識を御参考までに載せてみました。この道に興味ある方の御批判御指導をお願いする次第である。

From the bottom of the glass

Come world shaking opinions.

グラスから 批判 振り切る世界来る

(英を添えた)

Sake seems to have the most power

to stop the mind and start the mouths.

知力止め口開かせる酒偉大

(のもお酒)

Sake flows easiet into the greatest

cavity with most effect.

最大の穴にたやすく酒流れ

ここに私は生前路郎先生が霞乃先生に就て

語られた話の一節を思い出す。

それは「霞乃は川柳の翻訳問題でも、始めから川柳の持味であつちの詩を作らないかん。ハワイの詩の語源とか色々集めて、人には云わん、自分だけ楽しんでゐる。昭和廿六年十一月号の川柳雑誌に「川柳の英訳に就て」と題し霞乃先生が執筆して居られる。この中から我々の大要参考になる部分を抄録させて載く。

「国民性も違い、風俗習慣も違っている外人が唯文字通りに翻訳した川柳を見て、文字に表われている以外のものを何処まで趣味して呉れるでしょうか。

宇宙の真理を掴んだものや、一般人間の心理にふれた句などは、文字通りの翻訳でも理解されるでしょうが、それが日本の制度、慣習に関連を持ったものであったり、日本人独特の情緒にふれたものになりますと文字通り

の翻訳では折角の名句も、アッサリと「そうですか川柳」扱いにされそうである。川柳の翻訳は文字の解釈ではない、句意を伝えるのですから、川柳を英訳する時、先ず句主の心境になり切ることに、原句の文字に忠実よりも句意を明白に伝え、句の姿を髣髴たらしめる事に腐心すべきである。

然しこの方法も慎重な心構えでかからねば、自己の創作英詩川柳となる危険が伴う。私の一番要求したい事は翻訳された川柳が耳に心よく響く調子を持つて欲しい。日本でも英国でも詩形文学は未開の頃に存在し、散文は後の世に発達したもの、詩形文学は散文学の兄さん株であるという訳は、調子が持つ魅力に基く。

川柳は十七字と字数の制限があるだけです、英詩は字数(シラブル)が限られてあるだけでなく、アクセントが調子をとのえる上に重要な役割を務める。アクセントのある綴字とアクセントのない綴字との適当な配列により美しい韻律が出来る。このアクセントの特種な配列は四種類の韻律を造つて居る。

第一の形は「抑揚格」第二の形は「揚抑格」第三の形は「揚々揚格」第四の形は「揚抑々格」である。

「抑」とはアクセントのない綴字の標示で「揚」とはアクセントのある綴字の標示で、



前記の鈎括弧の中のアクセントの配列が詩の風格を定める根元をなす。この鈎括弧内の規定の配列法が幾つか集って詩の一行を構成して居る。英詩も多読多作すれば、この面倒に見える韻律の法則も自然に会得されて苦勞なしにリズムカルな詩を詠むようになる。

シラブル（綴字）とアクセント（抑揚）の研究は切っても切れぬ因縁を持つ。

川柳にも破調があるように、英詩にも時々何行かの中には破格も出来るが、却って内容を効果づけた場合が多い。英詩にはこの韻律の法則の外に有韻詩といつて一行の最後の綴字と他の行の最後の綴字とが互に韻を踏むことがある。

脚韻を踏むことは日本人には少々面倒ですから、無韻詩でもよい、せめて全体の韻律位はととのえ美しい英訳川柳を海外へ輸出したいものである。何とかして私もこの韻律に馴れ、たとえ一行でもリズムカルな作詩を試みたいと念願して行のであります。」

腹乃先生が元氣になられたら、我々後進のため未完成でも結構ですからその一部を発表されその蒙を開いて戴きたいものである。

戦前ボストン市の米人齒科医プロバン一羽氏は日本の俳句を作り「ホトトギス」の虚子選雜詠に投句入選されていた。昨今の日本ブームはホワイト氏のような英詩川柳の作家や日米柳友の英訳川柳試作者の輩出を見る機運

にある。川柳の世界進出の為にこれらの方々への陰陽にわたる支援を忘れてはならない。禿筆を顧みず一編を呈して大方の御支援と御批判を乞う次第である。

## このごろのことば

戸田古方

句を作るとき、どんな狙いのつけ方をし、どんな風に云い表わそうかと考えるのは大事ですけど、何より大事なんはことばやと思います。そのことばが近頃コツンコツンと行き当るように思えますんで、ひとことといふことになりました。

電車のピラに或る役所の名で「じんかい」と仮名で書いてありました。書いてある文字を読み、絵を見ますと「塵埃」やと解りますけど、なんで「ちり」とか「ごみ」ではいかんのか不思議です。

いろいろ注文をつけようなんてくることばもたんとあります。

「予算」ということばもけったいなつかい方をしています。「ご予算によっては如何様

にでもご相談に応じます」といわれると財布の中をのぞかれてようで、ホッチッチカモテナヤというてやりとうなります。もつとひどいのが「予算はおいくらで」です。こつちはお客さんでっせ。いうならアッさり「なんぼ位にしなひよか」と云うて貰うたら「こんだけや、頼んまっせ」と肚が割れます。

「設計」ということばも、テレビのコマアリアルなどでちよいちよい耳につきまます。「こんな風にこしらえてあります」ですむとこれを「こんな風に設計されています」というと当世の人には得心がいくらしいが、設計図一つ見せるわけでなし、やっぱり流行にのってP・R。設計が狂うててみいどんなもんやといふようになるのは私だけでっしやろか。

そのほかやさしい日本語でけっこういえることをわざわざ漢語をつかいたがる人がいはります。（）の内へ仮名で日本語をいれときます。

確認（たしかめる）設営（ばしょをつくる）撤去（とりかたづける）要約（ちぢめてゆう）：名（：にん）伝達（つたえる）補助（てだすけ）変更（かえる）要領（やりかた）貼付（はる）指示（さしず）往々（ときたま）清掃（そうじ）待機（まつ）勘案（かながえる）遺漏（まちがいないように）

耳できいただけでは意味をとり違えるのも交つてます。五分間程の話の中で使われた漢



大阪市 橋 本 緑 雨

屋台店ビルの高さも知らぬなり  
笑うことも四人になった賑さ  
湯の街を飲んだ気分歩いて来  
あった事に言いたして話上手

東京都 阿 部 佐 保 蘭

次の孫誕生  
星光る夜なり次の孫が出来  
一貫目とは有難い男の子

語をいじ悪う書取ってみたのです。

阪急電車の改札口で毎朝「定期券はご提示をお願いします」というてます。「はっきりお見せ下さい」でええし、混雑の中で聞き取りにくい「提示」やいわんでええのになあと思います。同じ阪急で「この電車は回送車でございますので乗車にならぬよう悪しからずご了承下さい」とご丁寧なことです。「お乗りにならないようにお願い申します」と素直にいうてほしいもんです。

又、これは地下鉄の話。大国町で一号線から三号線に乗り換える人達のために「お乗換えのお方は降りたホームでお待ち下さい」というてます。「降りたホーム」とは何事です。難波駅では「一番前の車からお降りのお

方は特に足許にご注意願います」とゆいながら同じ地下鉄の次の駅で「降りたホーム」とはことばを知らんのにも程があるとあきれます。「降りられた」と「られ」の二字でことはすんます。「お降りになった」と難波と同じようにもいえんのに。

正月に朝日の紙上に連載された小島政二郎さんの「明治の人間」という中に、今の人は

「はばかり」ということばを知らんと書いておましたが、この頃のことばの乱れにはほんまに我慢がなりません。昔、展覧会ゆうてたのを今では展示会やゆうてます。ことばが殖えたといえはいえまっけど、展覧会ゆうたら運動会などとおんなじように心を浮き浮きさせますが、展示会やと、陳べといたるさかい見んかい、買わんかい、覚えんかいと義務があるようで、どうもいきまへん。

「義務があるようで」とゆいましたが、「義務づけられているようで」と戦後はアチラ風という人が多うなりました。明治百年、英語教育が入ってますけど、こんないいようは

しませんでした。「会を持つ」が「会を開く」よりどれだけ便利か知りまへんが。そういえばバイヤー、メーカーなども安っぽうていやです。ちゃんとしたイギリス人ならバイヤーはディラー、メーカーはマニファクチュアというところでしょう。私が商売してた頃、値が高いをディアーといわずハイ、値が安いをチープといわずロウで間に合せてました。恥しうなります。

ことばの位ということも忘れたらあきません。言葉をつづめるいい方もあんなりせん方がよろしい。トンボリとかハシスジなんかいういい方は今まであんなりきいたことがなかったし、入試いうたら入学試験や入社試験やまごついでしいます。

「この頃の女の人は、ことに冬になるとパッチをはいて堂々と街をのし歩いている」と私が云うたら「あれはスラックスです」と女の子達に叱られました。実はどちらも間違っではないません。パッチは朝鮮語で昔々日本へ入ってきたことば。スラックスはコンサイスに「男又は女のゆるいスボン」、外来語小辞典(研究社)には「婦人用のスボン」とあります。尚、スボンはフランス語です。

たったひとつのことばでもこの通り。

(本社三月句会の柳話から)

# 金 泥 集

## 課 題 『知 性』

## 麻 生 葭 乃 選

まだひとり知性が邪魔な器量よし  
 ようやくと知性ゆさぶる人に逢え  
 もうすこし知性がほしい老い愚痴  
 知性ある祖母は炬燵でじつとせず  
 国会乱闘知性のなさをさらけだし  
 知性は満点と人事課のテスト  
 深酒をしても知性がつきまとい  
 現代を生きぬく知性エゴとなり  
 沈黙はときに知性を匂わせる

### 佳 作

理性なく知性あるのが踏みはずし  
 白痴美の知性のかけらさえみえず  
 栄転へ妻の知性も讃美され  
 逢うたびに知性が僕を引きつける  
 看護婦の知性へ無理が云いそびれ  
 知性また心へ鏡をしてしまい  
 水仙の知性が癪な猫柳  
 二いかにえす知性ともしき妻でよし  
 ひざまずく恋は知性を捨てて居り  
 夜を稼ぐ麗女は知性をチラと見せ  
 不潔だと幼なき知性母をせめ

### 軸

若後家の知性きびしき日をおよぐ

千夏 千よ 阿茶 小石 一栄 千さ子 醉夢 同 阿茶 小石 一栄 同 千さ子 同 同 同 醉夢 同 同 同 同 葭乃

7 月号 発表「メートル法」5 月 25 日 日本社 着便まで

## ★選 後 に ★

皆さんは知性と云うものを色々な  
 角度で具体的に表現していられ  
 ますが中でもきさ子さんの

「水仙の知性が癪な猫柳」は植物  
 の特徴をよく感受し得た句であつ  
 て、人間の心理をのぞかせたアリ  
 ガリーとも云うべき句でありまし  
 ょう。

人事をあつかった句では醉夢さ  
 んの「不潔だと幼なき知性母をせ  
 め」は複雑な人生スケッチに幅を  
 もたした句であると思います。

### (葭 乃)

### ☆

金泥集へどうかすると男性の  
 投句がある。これは編集部の手落  
 ちで「女流作家にかきろ」という  
 ことを明示していいからだが、  
 ながいきたりで書かなくてもわ  
 かると思つていたからである。

以前には、それを承知で、女名  
 前を使つて、投句してきた人があ  
 ったそうである。別にわる気でも  
 なんでもなく、かるい気持ちで投  
 句したのであらう。

### (F)

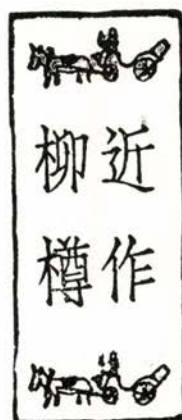
★三月句会の出席者 薫風・与呂  
 志・一三夫・孚彦・清子・双葉・  
 一栄・あきら・文秋・弓彦・鳥荘  
 ・白柳・柳志・庸佑・八郎・操子



マイペースで飲もう

アサヒ  
スタイナー

・きさ子・竹荘・誓二・玲人・好  
 郎・痴亭・古方・いさむ・静歩・  
 淡舟・白溪子・たつみ・美房・武  
 助・句楽坊・有子・加仙・一舟・  
 滋雀・トメ子・吸江・葛城・千梢  
 ・多久志・季賛・形水・金三・弥  
 生・栞・小松園・凡九郎・宣介・  
 入仙・よしを・静馬・水京・柳宏  
 子・水客・竜子・中性尼・すゝむ  
 ・圭井堂・梅里・専翁・生々庵・  
 舟遊・清人・恒明・宏子・葉子



# 北川春巢選

奈良市 村上春己

写真屋は鼻肩の鹿を呼んで撮り

温泉へ利子だけ残す貯金帳

借金に來たとは見えぬ顔のつや

値上がりのぐちと昼飯代を出し

また負けるパチンコ自動扉開き

大阪市 和田痴亭

上等の入菌いつまで生きる気の

釘一ツ打てないくせにタイラント

十字切る胸に記念のペンダント

鍵の束腰にぶら下げ敷いており

一枚脱いで底辺の春有難し

岡山県 賀芳月

七十の望み検診車へ並び

職人のポマード何事かと聞かれ

金がないからさつそうと風を切り

格ぶくがよ過ぎて税務署で泣けず

二号邸から税務署へ泣きに行き

七尾市 松高秀峰

安サラーいあの手この手もなく完納

遊んでる高級ママに控除あり

定年が近く仏事によく気付き

打算なく若さズバリと物を言い

広島市 上代美文

アパートも炬燵しまえば春となり

話せばわかるは飲める同士なり

文盲ゼロへ売れてる週刊誌

白痴化もカラーになつて念が入り

広島県 南条露声

錠二つ掛けてごつぽり盗つてかれ

残飯で飼つたと見えぬ犬を連れ

要る度を探す財布は高が知れ

卒業式喧嘩相手の仲のよさ

倉敷市 水谷 水

然乍ら相談役とはみくびられ

羽曳野市 谷垣 史好

国鉄の値上げがホームシックにし

出生の秘密が男嫌いにし

名古屋市 吉田 水車

用件も聞かず代書士墨をすり

あるところを見せてはなしかぬぎ始め  
高度成長こうでなかつた夜の膳

青森県 岩淵 一星

撤きえさの試薬よろこぶ四十すぎ  
長崎市 甲斐 策柳

囑託という捨てぶちも切れかかり

香典を貰いそこねて退院す

ホノルル 加川 カロ女

エチケツト子に教わつて母の老い

はげたは言わず額の広さ哉

貴夫人の一番すきなのは茶漬

鳥取県 鈴木 村諷子

小豆島遍路行

梅の里みかんの村を遍路みち

わらんじの昔を石の凹みにも

この島に人を信ずる人の住み

和歌山県 山本 泣笑

貝殻のように語らず故郷を捨て

不景氣へ地虫も外に出たがらず

来年もまだ着せる氣の編み直し

闘病十年神より人をまだ信じ

青春の骸よ書架の資本論

春の宵君子豹変したくなり

花札に方向転換する流会

欠点を見つける眼だけまだ老えず

事務の娘の襟から春の艶となり

出雲市 板垣 草丘

舌つづみしたので授乳きりあげる

わが詰めた弁当たべて共稼ぎ

公務員が多いと思う納税期

松原市 守屋 万竿

生真面目さ職場で家で狭く生き

二度三度はね警報機やつとつき

人はねた踏切りも春草が萌え

玉島市 井上 旭峯

子に果す約束父は稼ぎぬき

旗色へ八方美人策を変え

手料理が上手男の不倖わせ



倉敷市 水 粉 千 翁

羽曳野市 江 城 功 雄

百カ日もうどの辺へ行つたやら  
コンパクト会える涙を直しとき

満ち足りているのか番茶する音

郷 玲 人

応募者は全員採用して二人

恒例の花は御室にする夫婦

大和郡山市 中 内 孚 彦

唯我独尊凡人として生きられず

愛される不安ストーブの火をつつき

尼崎市 岡 本 昭 三

薄給の娘夫婦に貸す二階

故郷を思う日もあるヘルメット

布施市 坂 東 若 芽

印度リング箱入娘に似たる味

梅の宴下戸は歌舞伎へ行きたがり

笠岡市 木 山 要 次

無心ではなかつた熱いお茶に替え

妻の開腹手術に憶う

もう喧嘩すまいと性根入れ替える

大阪市 栗 田 くり 坊

心の余白に走馬燈がゆれ動き

かあさんの面影にカーネシヨンの日

想われている幸福に春の風

ゴネ得の土地を継ぎ継ぎ新幹線

田能遺跡にて  
尼崎市 井 沢 正 直

千年のねむりさまして遺跡とは

議員から云えば無い袖振る市長

大阪市 森 本 良 夫

お水取りにも現代はPR

三男大学受験

合格へ親の心配別にあり

大洲市 堀 内 暁 風

ちやはやと頭の悪い子に育て

老らくのだんだん解るお茶の味

愛媛県 関 本 柳 剛

配膳車春が綻ぶきしみよう

いい話だけを束ねて見舞客

西宮市 船 津 千 夏

刑務所にはいつて初めて聖書読み

生活の姿アパートの窓に干し

北九州市 三 上 春 雄

悪銭の不思議やつぱり利子がつき

悪筆が病の友を力づけ

愛知県 槇

紫 光

誰が飲む選挙事務所の菰かぶり

恥しいことも新婚たずねられ

河内長野市 森

本 黒 天 子

あれも買える之も買えるふところ手

スキー服やつぱり編もの手放せず

鳥取市 近

藤 秋 星

露払いのようにスピッツ従えて

ミス農協やつぱり農家へは嫁かず

八幡浜市 平

田 砂 生

玩具屋の前から早いママの足

ためらわずお酒を吸った貸衣装

寝屋川市 福

富 隆 子

飛行機も過労 分解してしま

珍しい料理特価かと子等あてる

大阪市 小

東 琴 女

病める身になんの白砂ぞ青松ぞ

賞状の授与へ借り着でかしこまり

石川県 同

村 虹 要

嫁自慢しあわせそうな顔をして

会社ではしばらく帰つては敷かれ

島根県 堀

江 芳 子

防水のテストがしたい腕時計

二三本抜く気の白髪へきりのなく

出雲市 竹

内 李 朋

菜の花 菜の花 ロマンチックな母となり

春霞南無大慈大悲観世音

出雲市 竹

内 李 羅

オープンにして春を切るスポーツカー

母の肩揉んで故郷の久しぶり

松江府 鈴

木 壮 樹

定年の背広ハンガーによりかかり

夫唱婦唱子にめいわくな進学期

出雲市 森

山 健 太 郎

ソロバンをしてみるとやけに人が来る

趣味の会まで商敵と派が違い

竹原市 三

宅 不 朽

船の酒船に酔うたと負けていず

高卒の十日見ぬ間のアイシヤドウ

大阪市 古

川 集 一

凡人同士今朝も三面記事のこと

草餅のはなしそれぞれ故郷がある

大阪市 はじめ・やなぎ

積立は満期間近かの白髪染

母ちゃんの手綱さばきもアルサ口出

松江市 町 中 村 魚

先祖からのペース農閑は山仕事

兼業農兼で稼いだ自家用車

高槻市 山 田 スミ子

日曜のプランへもう子らついて来ず

物価値上げ内職みしん派手に踏み

大阪府 新 田 釣 月

恋人と割り勘デートの現代つ子

足くんで女作法の本を読み

高知県 山 川 勝 子

抵抗か意地か三歳返事せず

日々好日愚痴る事なき老の幸

米子市 八 木 千 代

病み姿見て欲しくない人待つ

また母の生活から出た智慧を借り

大阪市 小 谷 葉 子

縫いたてを見せる人なく春がゆき

年よりも地味着て玄人にまちがわれ

名古屋市 花 東 千久良

メーキヤツプしてからが金にする仕草

島根県 堀 江 正 朗

散髪は十も若さへあとがえり

島根県 石 田 清 泉

菓つかむ思案へ買うた宝くじ

低頭へ無言の客の意地悪さ

島根県 小 砂 白 汀

よくよくの事だと損してまた信じ

神戸市 吉 田 隆 史

コンパクトパチンと閉じて諦める

出雲市 王

神経がいらだつネクタイゆがんでる

松江市 岡 崎 祥 月

紙雛のまだ春寒むの昼寝して

布施市 竹 中 時 三

読経は所詮坊主の独言

福島県 佐々木 ゆかし

けとばした石まで僕に逆う気

小松市 田 島 健 二

独り者出前をつれて帰つて来

堺市 斎 藤 亜 也

ラツシユアワー牛歩のバスに胃が痛む

仙台市 川 村 映 輝

水ぬるみめだかの学校も始業式

善通寺市 伊 藤 歌 子

行案の夢路焦熱地獄沙汰

茨木市 高 木 繁 太 郎

合作で小売業者のマーケット

熊本県 永 松 道 雄

ふとわれにさもししい心あるを知り  
羽咋市 三宅ろ亭

芦屋市 咲岡みどり

生き延びる予算狂わす貨幣価値

鳥取県 わたなべ・かずこ

柿のヘタ三月の木にへばりつき

大阪市 西本保夫

腎臓にも石をつくつた石ブーム

岡山県 瀬戸山文平

部分品町の名医でとり替える

愛媛県 澄本満子

あこがれと抵抗ケースにつめ家出

竜野市 森下峰子

満員へ無理な動きが痴漢めき

北夢之助古稀祝賀  
第17回  
新潟県川柳大会

- ★日時 昭和40年 6月  
12日・9時半
- ★会場 新津市駅前 春雨
- ★会費 二百円(全員に夢之助色紙)
- ★宿題 各三句・出席者も投句のこと。
- 雑詠 北夢之助選  
母校 山田加勢夫選  
日本 水瀬片貝選  
雑詠 大野風柳選  
雑詠 白石朝太郎選  
雑詠 川上三太郎選
- ★5月20日着・百円同封・夢之助句染め贈呈
- ★質問に答える  
川上三太郎・白石朝太郎(投句先)
- 新津市駅前 柳都川柳社

詠えたように卒業式の雨  
竹原市 小島 和幸改め 幸

おばあさんになりたくないが孫は抱き  
米子市 林 瑞枝

愛される確証得し夜の星きれ  
鳥取市 藤本 佳女

定年へ捨て扶持もらつた靴の音  
鳥取市 藤本 礎山

アンコールしたい過去あり瞳の中に  
西大寺 岡崎 和治

すこやかに育てひな壇小さくとも  
羽曳野市 杉本 白扇

交通安全山陰川柳大会

- 日時 五月十五日(日) 午前10時
- 場所 倉吉市越殿町 倉吉福祉会館ホール
- 特別課題 「安全」参加各川柳会の団体戦
- 兼題 「事故」「免許」「踏切」「招く」「強情」
- 会席 一般柳人個人戦
- 費題 当日五題を発表。各題三句投句のこと。
- 三百円。(投句のみは百円同封、五月十日着便)
- 倉吉市荒神町三九〇
- 倉吉打吹川柳会 奥谷弘朗



★秀句鑑賞★

前月号から

後藤梅志

春早々昔話に嘘を混ぜ

(没食子)

川柳塔社同人の特色は、相当の年齢層の人々が、健在でいることを、挙げる事が出来る。

没食子氏が、その一人であることも、まぢがいない。句境は枯淡。その性の温和なさまがよくうかがえる。

「昔話」というものは、落ちついて聴けば値打ちのあるものだが、この頃は誰れもあまり聴きたがらない。実は本当の良さ、面白さは、話だけでは通じないのが歯搔ゆいくらいこの句のように、嘘をまぜられては、それが、いよいよ分からなくなるおそれもある。年寄りの信用に関する問題だが、これも一つの抵抗感とみることが出来る。

「春早々」が、面白いムードを出している。飽きが来ない句だ。

文化財らしく刻んだ顔の皺

(快夢起)

この頃表彰されるもので、快よいものに、人間文化財がある。これはコツコツと一生を芸道の研究にささげたり、地味な工芸品の製作に従事した、民間の功労者がそれにがい当するのだが、その人たちは、新聞社のインタビュに、世にも晴々と、その栄誉を顔にほころばせている。

しかし、その顔には、世の中の風雪をしのいで来た、深い皺が刻まれているというのだ。国家、人類に貢献した人というのは、何も表彰されるような、目立った人ばかりではない。という意見も成り立つのだが、世の中は不平ばかり云ってもはじまらぬ。

世の中を太く短かく渡ろうとする人の目からは、世渡りがへたで、コツコツ一生を過ごす人が、バカのようにも見えようが、コケの一念というか、コツコツ組が、最後の勝利を

占めるようだ。

この句は何かしら、老人層に感銘をそそる句だ。

草の芽が出たぞおしっこさせながら

(薫風)

椽側から子供を抱えて、おしっこをさせている。と、おしっこのとどくあたりに、草が芽をふきかけている。「ああもう春が来たか」という感慨がよく出ている。

早春にもいろいろあるが、寒い、枯渴したような、一月の末から、二月にかけて、ばかりと温かい日が来ると、わずかの間に、草の芽を見出すところがある。こころの中でわっと声をあげたいような、衝動をかんじる。

自然の猛威に虐げられた、冬の毎日、しつこい慈母にいじめぬかれるのにも似て、限り無く、人間の弱さを感じるが、この「草の芽」を見出した時の歓びは、四季感のうちでも、いちばん感銘の深いものだ。作者はそれをかんじたのである。

背の高い作者が、背中を丸めておしっこをさせている状もほほえましいが、この句には、潑刺たる、作者の若さが走っている。

共稼ぎの家の屋根だけ雪残る

(清生)

北国の冬は雪に明け、雪に暮れる。屋根の雪は、勤勉な人々によつて掻きおとされ、溝の中へ落ち、街路も掃き清められるが、共稼ぎの家の屋根の雪は、いつまでも残されているという。

この句は、北国のある町中の叙景のよう

だ。が、この句は叙景句ではない。

この頃は、都鄙を通じて共稼ぎが多くなつた。だから、この句は都会でも想像されることだが、都会では大抵屋根の雪掻きはしない。自づから適用は狭められるが、さればといつて、この句の持味が減殺されることにはならない。

この句のもつさびしさである。共稼ぎをしなければ、暮して行けない人たちが居る。こんな社会は、昔はなかったのである。主婦が家を出れば一定の時間、家に帰ることが出来ない。ということは、一家の営みにとつて、どんな苦痛なものか、体験を経なければ分かんぬことだ。

### 年賀状テレビは春の海を弾き

(李 朋)

一ぱいやりながら、東になって配達された年賀状を、家中で見る。これは終戦後、荒涼たる世の中で、郵政省の仕事感謝する一日である。新年の良さは、今更申す迄もないが、年賀状を介して古田と無沙汰を交換する。元旦の一日は、歳もすっかり若返る。

それにテレビは、箏曲の「春の海」を弾いている。春の海は、故宮城道雄作曲の、最もすぐれた曲で、洋々たる春の海が、かきながら琴糸にピチピチ躍っている。

前の晩は、恒例の紅白歌合戦で、ジャズや歌謡曲には、頭の中はしびれてしまっているが、新年に聴く琴の音は、本物でなくとも格別である。

この句は、「春の海」が全体を占めている

ことが、分かるのである。

### (一人ぼっちの古稀)

#### 人様の年に思えておかしがり

(阿 茶)

阿茶さんが古稀を迎えた。これは識る人も識らざる人にも、衝動である。阿茶さんという人は、どう見ても精々四十台なのである。

「男皆阿茶に見えて売れ残り」

「口ひげの生えて来そうな女史であり」

「口答えならぬならぬで育ったが」

この一連の作句が示すように、厳格な家庭に育って、奔放自在。皮フ科の先生でありながら、哥沢の名取りという。ちよつと無い存在なのである。

(一人ぼっちの古稀)というのは。一人切

りの中に、他に類型が無いという意味も含まれていて、ほろりとする女らしさが感じられる。一輪の寒椿が風に堪えているのである。つらいことも。嬉しいことも可笑しいこともみんな自分の胸一つに納めて、押し切る。こういう生き方を高く評価したい。

### この傷の深かりしこと砂に寝て

(章 子)

ともすれば、傷を負うのは女である。どんなことがあったか知らぬが、「砂に寝て思うこと」は、まさか復讐ではあるまい。

女というのは、失恋をするたび、かしくなるものだ。見ちがえるように、強くもなるものだ。しかしこの句は、疼くところを砂

に埋めて、涙を流している。美くしいと思う。これが詩のところであろう。

この作者は、目を見張るほど生長しているが、濫(らん)作はしないことである。

### 無理をした金に水引掛けて出し

(小松園)

この句は、前掲の「春早々」と同様に、軽る味の句といつてよからう。あと味がいい。がしかし、旧作。

「若草山風のある日と見えぬなり」

「ひたかくすすべを女の子の覚え」

にみる如く。何処となし、パンチが利いているところは、小松園独とくである。もう戦前派と自認しているだろうが、年期を入れた腕は確かなものだ。

### 確かとは只コツコツと砂が過ぐ

(野迷路)

人間のすることは間違ひだらけだ。信用がかけないのは、他人もそうだが、自分自身も頼りない。ロケットが、月の世界へ軟着して見たところ。月の表面には、人間の許容量をはるかに越える、放射能があることが分った。こんなニュースを見るたびに、すべてのことが不確かになり。今はもう、何もかも「コツコツと砂をきざむ」天体の運行ぐらいいしか信用が出来なくなつた。と感じている作者は、尤もなことだ。

長生きをしてもこう世の中が不確かでは、学問も、国家の発展も、目の黒いうちに見る

## 雅号ぶつちやけばなし (12)

確か昭和十三年頃であったと思う。国鉄小郡駅にいた頃、下関川柳社の鯛好坊



・長野井蛙・

ながのせいあ

氏が主任として赴任してこられた。その頃下関駅には市多様、半休、九呂平氏など錚々たる大家が沢山居られたので、鯛好坊氏の要請で川柳の指導を受けるべく駅内の同好者を糾合して一日川柳会が催された。これが契機で小郡にも川柳会を創る運びとなり、その幹事を私に依頼された。しかし性来引込思案で、交友性に欠けた私は「井戸の蛙」で何も判らないと断わりつづけていたが、とうとう断わり切れず引受けることにした。爾来句会の度に「井戸の蛙」で通しているうち、いつの間にか「井蛙」とな

無職・六七才

ことは覚束かない。畢竟は、物欲だらけの間社会だ。恐らく、漱石もこう考えたことだろう。

国道へ山羊が寝そべるのも故郷

(奇童)

豊かな詩感を盛った句だ。

中国地方の高原地帯には、今もなお広大な放牧地がある。こうした悠久な天地に住む人は、万事こせつかない良さがある。牛も、馬も、山羊も、よく云うことをきくような気がして、羨ましく思ったことである。

汚職の河童議員でござります

(彰男)

汚職はいたる処にあるが、市会議員や、町会議員などになると、毎日の日課が汚職につ

ながっている観がある。

この句は、ビシリ、と汚職に止どめをさす様な趣きがあつて、頗る好感のもてる句だ。穴があれば、議員さんは這入りたいであろう。

安い方の床屋が暇なもの世相

(雄声)

木下幽王さんの

「閑だから床屋へ来ればこども閑」という句を思い出したが、これは幽王さんの秀作である。今は故人でまことに惜しい。この句は、世相批判の、いいところを掴んでいる。

床屋が勉強をして、安く刈ってくれるのは有難いが、至ってオソマツなのが多い。自然、

高い料金の方へ行くことになる。これでは床屋さんの商売がヘタということになる。

これは、役人が料金をきめるから、料金が高くなるのだ。役人は料金をきめるときは骨を折るが、あとがルーズだ。なんと厄介な世相なるかなである。

山茶花になんの寒さとはげまれ

(旭童)

山茶花は、梅よりまに冬咲く花だ。山茶花の咲く処は、大抵、藪陰か、根根か、寺の庭先かである。つまりスキや、クワを肩にかけてあるく処に、咲いているのかと思う。山茶花は、小じんまりした、淋しい花だ。

この句は、作者が、山茶花に励まされた。この心意気が、ほほえましいのである。佳句。

配達夫草書も読める人と知り

(金三)

恐らくこれは、郵便配達夫か。むかしは「脚夫」と云っていた。無学の人が多かったが、商売柄へたくその草書でも、判読したものだ。

元来、草書は余程熟達した人でないと、書かぬのだが、最近はややくしくなった。

その原因は、近頃出来た新制漢字は、みな「草書」から採った字体で、これをなぐり書きすると、判読がいよいよ、むづかしくなる。郵便の字は、ていねい書いて、始めて趣きを増すもの。この句は珍らしい句だ。



# きのう きょう

本多 柳志

◇松山善三氏の「映画と文化」についてを中

長野県 高峰 柳 兄

陽だまりへ弧独を埋める昼休み  
子の背丈見上げて母は言い負ける  
日曜の朝寝の寝息みな揃い  
共稼ぎ夕食おごる順があり

和歌山 秋 月 宏 方

何が淋しい犬遠吠えをまだやめず  
人生本番もうすみました共白髪  
旧道はいいなと思う一万歩

大洲市 米 沢 曉 明

雑草のこんな荒地も売れていた  
プラカード鉢巻しめて法治国  
お手植の松は一生垣の中

松山市 月 原 宵 明

張りつけはこうかと思う心電図  
不渡りへ空の危険を云うとれず  
豆腐屋の後継がなく休み勝ち

央公会堂の文芸講演会で聞いた。松山氏はシナリオライターや映画監督としてよりも高峰秀子の夫君として、知られている人である。

松山氏はこう云う。映画なんて云う代物は文化と関連させて考えるには、余りにも低俗なものであって、所詮大衆の安直な娯楽物でしかない。其の映画も昭和二十八年頃をピークに、其の後年と共に観客数は漸減している。年間十三億人からあった観客が三十九年度には、僅か二億人台に減って来ている。このように映画が一般大衆から見放された理由は、勿論テレビの影響も無視出来ないが、私は其の一番大きな原因は映画が「完成して進歩が止った」事にあると思う。

立派な原作、良い脚色、最良の演技、秀れた監督を揃えても、現在の映画は最早大衆の魅力の対照ではなくなった。と云うのである。

◇事実映画が、無声からトーキーへ、テクニカラーから天然色へ、七〇ミリからシネママ映法へと、映画が変化と進歩をつづけている間は、大衆から見放されずについて来たのであった。この事は映画の世界だけではなく、俳句の世界にも云える事で、一応完成して行きつまった俳句が、無季へと突っ走ったり、活け花の世界がオブジェとか前衛とかで、焼け残りの電信柱や錆びついた針金を、床の間へ持ち込んだのも、完成して進歩の行ききつまったこの道の魅力を、大衆につなぎ止める涙ぐましい努力に外ならないものであったのではないだろうか。

◇「完成して進歩が止ったもの」は永く大衆

## 第二十回長野県川柳大会

日時 五月十五日(日) 午前九時半より

会場 須坂市臥竜公園内(須坂市公会堂  
(バス臥竜公園入口下車五分))

会費 五百円(昼食・宴会費・発表誌含む)  
宿題 雑詠(各二句、同一句を禁ず)

選者 中島紫痴郎

金子 吞 風郎

山崎 鮮 紅

石曾 根 民郎

金井 有 為郎

席題 七題予定(各一句吐す)

特別課題・選者 高峰 柳 兄

賞 長野県川柳作家連盟杯・他多数  
(送句はいただきません)

連絡先 須坂市太子町・永申きみお

主催 長野県川柳作家連盟

臥竜 川 柳 会

岩 魚 川 柳 会

奥しなの川柳会

の魅力の対照ではなくなる。と云う原則を考えて見るとき、川柳も既に「一応完成して進歩が止ってしまった」と云えないだろうか。もしそうだとするならば、私共にとっても川柳にとっても大変な事であって、俳句や活け花のような転換や革命も出来ないとしたら、何らかの一大転機を迎えたのではなからうか

映画館今日もジュースが売れ残り



# 歡喜仏と阿片

大陸放浪

東野大八

北京站から十時間ほど汽車に乗ると、蒙疆の首都張家口に着く。

蒙疆の入口が南口という駅で、ここで連銀紙幣と蒙疆紙幣を交換しなければならぬ。ここを出ると、汽車はポツポカ、ポツポカとしんどそうに、木も草もない、地隙のような山合いを上りはじめる。どうやらやつとここに着いて、一息入れるところが、居庸関である。

仰げば頭上はるかに、万里の長城のギザギザがみえる。駅舎は小さく黒煉瓦なので、日暮などは山峡だけにやけに寒々として、よみじの国の真木戸みたいだ。

万里の長城は、山海関からはじまって、えんえんと外蒙の果てまで、二千四百キロの長さでつづくのだが、居庸関はその長城の口あけ近くにあり、滿州事変では大変な激戦地であ

あったところだ。この辺の長城は、黒い煉瓦が風化して、さすればゴロゴロとわけもなく崩れ落ちて、ところによっては痩せ馬の背中を歩くようで、交通ト絶のところも多い。私がこの長城に立ったときは、野菊がまっ盛りで、山肌を埋めつくして谷をおおい、うす紫のカスミを作り出し、そこに薄黒色の長城はうねうねと天と地にかかっていた。

「雲より出でて雲に入る

万里の長城越えゆけば  
果てなき山河限りなく……

というた、があるが、全く仰せの通りである。このうたは、詩人八木沼丈夫の作で、この人こそ、かの有名な「どこまでつづくぬか行」の作者なのである。私の柳名「東野」というのは、ほかならぬこの人の命名である。

長身瘦躯、おでこの奥にケイケイたる眼光があり、腕を組み一方の手の指先を高い頬骨に立て、朗々と自作の歌詩を口にするときは、すごい名調子である。

私が蒙疆に憧れ、胡砂吹く張家口へ転動を命ぜられても欣然としてその途についたのも、もとはといえばこの人のおかげだ。

「オロン湖畔の草青く

馬は肥えたりあゝ祖国……

君は、この「蒙古青年の歌」を知っとるじやろう、わしが快心の作でね、君たち若者こそ、この天地の馬腹を馳使するジンギスカンの末裔だ」

テナことを調子よく言うものだから、馬の下から三蔵法師を仰ぎみる悟空のように、私はホレボレとその声をきき、イカれてしまった。紅顔カレンな二十歳もはじめのころだからムリもない。

まあ、そういう具合で、一年半の張家口勤務と相成ったわけだ。張家口は首都といってもまことにお粗末、日本軍の駐蒙司令部と、兵隊相手の飲みや、料理屋のたぐいで、現地側からすれば、駱駝の車庫？みたいな塞北の中間都市に過ぎない。もっともここには蒙疆政府の本庁があって、その王様徳王がいたことだが……

ところで私は、この蒙疆政府を好かなかった。徳王はカイライで、金井主席とその側近

の日本人が駐蒙軍の後盾で動いている。しかも、この政府は阿片財政でもつていた。何さまここの特産物といえどジャガイモとケシだけだから、イモだけでは世帯は張れない。結局途方もない財源を生むケシの栽培、すなわち阿片に一切合財おんぶした。

今なら鉢植のケシを作ってもちよつと来いだが、蒙疆ではケシが地平線を埋め、山を掩い野を掩うていた。妖雲妖花の天地で此奴の収獲期には政府は五色の毒キノコと変じた。華北政務委員会の教育総督弁、蘇休仁は日本という文部大臣のくせに眼に一丁字もない。もともと緑林の出だから致し方がないのだが、彼は蒙疆政府に出かけ、そのお土産に生阿片五キロを買った。巨軀をゆすって大満悦の彼の貌を、私は今だに忘れない。やる方もやる方が貰う方も貰う方だ。

とにかくこんな途方もない阿片国だから、阿片の吸飲器売りがむかしの夜の店のステッキ売りさながらに、街頭で盛大に店を張っていた。本ヒスイや本象牙の豪華版までまじっていた。

この色街、福寿街は北京の前門街からみれば暗面子（アンマシ）（最下等）の部類だが、私はよく通った。しかし阿片を吸わにゃあモチないので往生した。

「主さん、吸いなまんし」

てな調子で煤ばけた筒先を向けてくる。一処に寝てもお客より煙の方にうつつを抜かし時にはトロンとした眼で、

「あんた、どこから這い出してきたの」  
というのだからイヤになる。

蒙疆にはラマ廟が多い。牛鬼に、金色のお尻をむき出しにした美女が、チンコロ姐ちゃんのマングそっくりに正面からとびついて、

両足ではがいじめにしているのが本尊だ。オルドスの地の果てに、忽然と震気楼の如き城廓を見出し、近よるとそれはラマ廟の一

大衆落であった。何を食っているのか、新品の番傘みたいに脂切った坊主がうじゃうじゃいた。ここを訪れたとき、いきなりこの坊主どもに取り囲まれて、胆を冷やしたら、中の魯智深みたいなのが、「タバコないか」と手を出す。二つ三つやると、いいものをみせてやるう、と奥の院の薄暗いところへつれていく。そこには牛が四つ脚を曲げてべたんとなっていて、その下に仰向きになった金色裸の女神がふとんがわりになっている。坊主はその二体の爪先と牛のお尻の方からのぞけという。のぞいても格別変りばえもなさそうなのでごれいした。

このラマ僧どもは、人民の上に君臨して、あこぎな布教搾取をやっている。その悪名高い連中だけに、長居は無用と早いとこ逃げ出

した。彼等は十人が十人ひどい性病だ。こいつに水揚げされた蒙古婦人は殿方の旅のお客がくると喜んでトギに出るが、いい気になっていたらひどい目にあう。大事な道具の先の鈴つこがポロリと落ちて、燃えさしのローソクみたいになつてしまふ。これをラマ病というが、まことにどんびしゃりの名ではある。

蒙古の名物はオボ祭りだ。オボとは大平原を区切る境界線を目印で、石ころや牛骨などで出来上っている。ここでもどこで乾燥した牛糞をたき、でっかいバーベキューと、ガソリンみたいな馬酒をのみ、うたい相撲をとる、踊るのである。

オボ祭りを別名星まつりというが、この夜は月のない夜が選ばれ、星の明るいのも道理。この星は斗の如く、マスの如くでっかい。その光りは寒冷の白夜を描き出す。ために酒つよく、肉熱きはらずで、その饗宴は、霜濃ゆき払曉までわんさか、わんさかとつづくのである。

アジア大陸の一角から長馳してヨーロッパを襲い、その馬蹄でじゅうりんしたジンギスカンも、この大草原の炎のうたげに酔い知れたのかと思うと、若い私は美くしい蒙古娘を嫁に貰って、驕馬の背に抱き上げ、月明の夜を思うさま疾馳しようかと真剣に思ったことであつた。

# 作句教室

研究 題「鼻緒」

## 清水白柳

再会の視線鼻緒にまで走り

千代

女心の微妙さをよくとらえていて申分のない句である。頭の上からつま先まで観察している姿を「鼻緒にまで」とあらわしたのだ。

雨上り鼻緒の切れたのも洗い

勝子

都会ではもうこんな風景は見られないが、つましやかな、そして明るい陽差しを感じさせて成功している。

ふるさととは小石で鼻緒立てたとき

筑柳

横鼻緒切らし小石をつめたて

雅城

幼なき日の想い出であろう。私にもこうした経験があるのを覚えていて楽しい句である

藁草履の日焼けの跡は継がそまい

与志

素足に鼻緒の跡がくっきりと残っているのを眺めながら感慨にふけていて父親の心はいかなく知ることが出来ると思う。

黒塗りに紅緒がうれしかった感傷

千夏

卒業へ鼻緒もも早や女なり

清泉

感傷という字を色々考えて見たのだが矢張りこのままでいいと思った。卒業の句はも早や女と思った作者の意志を尊重したい。

市場行き赤い鼻緒が気にならず

初雨

そこまで赤い鼻緒の妻の下駄

静水

ちよつと出かけるのにそこにあつたのを、

ひっかけてゆくという心理を詠んでいるのだ。

一寸した油断仔犬が鼻緒噛み

S

恩師とも知らず鼻緒をボチが切り

酔夢

一寸した油断という句よりも恩師とも知らずという具体的な言葉に諷刺があると思う。

紫の衣鼻緒の真白さ

Y

修業僧の白い鼻緒に悟られ

文平

白なめし白足袋和尚にきまつとり

痴亭

萩の花白い鼻緒にみちびかれ

美代

紫の衣の句には作者の意志が出ていない、

紫と白との取合せに過ぎないと思う。修業

僧の句の下五文字の悟られというのは、仕方なくつけた字句のように感じられたがどうだろうか。和尚の句には作者の感じが出ている。それは結びのきまつとりというところにある萩の花の萩は動かないと思う、萩でなければその古い寺の感じがでないからである。

性格がゆるい鼻緒にまで出てる 実男  
蹴るようにゆるい鼻緒の下駄がゆく静観堂  
発車ベル駆ける鼻緒が弛んで来 若芽

最初の二句はゆるい鼻緒を描いているのだが、発車ベルの句は和服姿の焦らだたしい気持がよくつかまれていて佳いと思った。  
切れた緒の意味さえ知らずハイティン白汀  
古かった鼻緒を言わずかついで居 千梢

ハイティンの句は鼻緒が切れたら凶いという迷信も知らないということなのだと思うが説明しようとする気持が先走って堅い句になつてしまった。古かった鼻緒の句はその迷信を笑っているのだ。

鼻緒ずれ和服のデイト気が疲れ 酔夢  
鼻緒ずれなんどと見せて春の妻 正直  
私鉄スト鼻緒ずれしてまで歩き 秋月  
おや指で引ずつて帰る鼻緒ずれ 弘生  
鼻緒ずれ染なつかけには兜 繁太郎  
和服の句にはいつも洋服で生活している娘さんの姿が出ている。ふだんはサンダルでいいのだから緒のしまった草履では因つただろう。春の妻の句にも同じことが考えられるが



この場合の妻の姿には浮き浮きしたものがある。私鉄ストの句には着想の広さがあるが、こんなこともあるのではないかと作者が想像した句ではないかとも思った。おや指の句は経験が生んだ句であろう。最後の句の結びの兜という字だが、これはかぶとを脱いだということの略であるが、こうした表現は柳樽によく見るが現在では使っていないので、こうした場合は「案なつかけ有難し」とでもして直接的な表現にしてほしいと思う。つかかけの句が出たので序でに並べて見よう。

替鼻緒いらす文化をつっかける 釣 月  
鼻緒も知らずみなサンダルで済まし 亜也

世の移り鼻緒に縁のない暮し Y  
馴染まないにつっかけ鼻緒ほめて履き 辰始

替鼻緒の句は理屈っぽいと思うのでこの理屈を底に秘めた句にする習練をしてほしい。サンダルの句にも同じことが言えると思う。世の移りの句は案に出来た句でまとまっではいるが深さがない。馴染まないという句には作者の意志が出ているが、この反対のことも言えるので決定的な句とは言えないようだ。

鼻緒切って明治のプラトニックラブ 保夫  
鼻緒からロマンス語る古稀祝 春雄  
いにしえは切れた鼻緒で恋になり 娘句楽  
夫婦ぜんざい鼻緒すげたのがえにし 雄声  
相思相愛鼻緒をすげてやった過去 村調子  
手拭の鼻緒が心を結びつけ 白扇

鼻緒たてなおしてくれた人と縁 明子  
ハンカチを裂いて鼻緒にかけた恋 李羅  
課題が古かったせい古い思想の句が多かったのは止む得ない。明治の頃やいかにしいうことなどと共に芝居で見たことを句にしたものもあるが、どの句にも言えることは深さがないということだ。それは頭の中で作りあげた句だからだ、ということではないか。足ぐせをフツフツ言うてすけて呉れ

鎌足と言う程鼻緒切ってくる 滋 雀  
鼻緒切り高ひくふんで児は帰り 寿美司  
面倒と切れない方も提げ跌足 句楽坊  
この四句は実感の作品である。多少こつこつしていても、表現が稚拙であっても好感がもてると思う。

水溜り切れた鼻緒をもて余し 三時  
切れそうな鼻緒にビッコ引いてやり 要次  
切れてから鼻緒の有難さがわかり 秋月  
ずるずるの鼻緒ぶざまに帰りつき 不水  
急ぎ足鼻緒が切れた胸騒ぎ 李朋  
この五句はそれぞれの作者の意志が結びの文字にあらわされているのだが、その結びが上五文字との関連にどれだけ役立っているかということを考えたい。

あり布れて鼻緒を縫った頃もあり 若芽  
負戦とも知らず鼻緒まで手作りし 千夏  
戦争はいや鼻緒までつくらされ 酔夢

あの当時の物資不足を思い出させてくれた句である、作者の年令がわかるような気がする。私も柱の切れ端で下駄をこしらえたこともあったのだ。豆を売ってもらうために持っていくものを。

団長の下駄の鼻緒の太いこと 弘 朗  
バンカラの鼻緒が白い学寮歌 李朋  
明学生の威信鼻緒へ太く生き 清泉  
応援団の団長に羽織はかまと大きな下駄はシンボルのようになっていく。それを詠んだのだがやや説明調だった。学生の太い鼻緒ももう過去のものになってしまったようだ。

下駄よりも鼻緒の寿命長うなり 藤波  
いい鼻緒つけた草履は値があわず 鉄舟  
鰐とかげ蛇の鼻緒が潤歩する 美代  
うかつにも鼻緒に惚れて下駄を見ず 白扇

文数を聞いて鼻緒の締め加減 芳子  
鼻緒もだんだん強くなってきたのは靴下と同じだろう。鼻緒にも皮製のものもあって、とても手が出ない程の値段だったのは面白い所得意そうに潤歩するのはさぞ気持のよいことだろうと思う。そうした鼻緒に惚れたという句は一面の真理をうがっているようだ。文数の句は女性でなければ詠めない境地である。佳句だと思った。

ゴム草履鼻緒の色の平和にて 松風  
色の句は沢山あったが平和な色がよかった  
水遊び足に鼻緒の色が付き 双楽



俄雨足袋へ鼻緒のあとをつけ 芳子  
染めたものは水に弱いのでからこんなこと  
になったのであらう。

鼻緒ある下駄に戸惑うシームレス 弘生  
靴下が鼻緒の意地をもつトイレ 安彦

つかけて穿かれ鼻緒もへそをまげ凡九郎  
サンダルならシームレスでも素直だがトイ  
レにある下駄の鼻緒には抵抗を感じたのだ、  
そして横向きにでもつかけられては裏返し  
にもなりたくなるのだらう。三句共面白い。

鼻緒自慢手にもはかせて見せてくれ 隆史  
鼻緒一つきめるに女まだ迷い 千梢

よっぽど気に入った鼻緒なのだらう、土へ  
おろすのが勿体ないというわけか。まだ迷い  
という句は女心の一端をのぞかせてくれる。

よう似とる鼻緒風呂屋で替えられた 痴亭  
平常履きだとそんなに変ったものでないの  
履きよい方をはいて帰られたのだ。

右左わからぬ鼻緒面白し 美智子

靴もサンダルもつかけても右左の型がある  
のに鼻緒には良いものは別として平常ばきな  
ど、どちらにでもはける。そんなところに作  
者が面白さを感じたのだらう。

朴下駄の鼻緒威勢のいい出前 正朗  
高下駄の鼻緒ベタルで出前肩 繁太郎

前の句には威勢のいいという作者の感情が  
あるが、後の句は肩にのせているという説明  
に終っている。もっと省略して情景を考えさ

せる字句を選びたい。

下足札芸者はんかない鼻緒

下足番鼻緒で客の筋を知り

鼻緒から想像してた妻の客

見覚えの鼻緒に友の待つを知り

下足札の句は下足札に必然性がないので弱  
い句になっている。下足番の句は鼻緒でなく  
てもいいところに弱さがある。妻の客の句は  
想像してたという語句がはつきりしないよう  
だ。見覚えの句は佳い句であると思う。

ささやかな善意老婆の鼻緒すげ

子を肩にもたらせ鼻緒たててやり 旭峯

すげてやるといふ句は沢山あったがこの二  
句にしばった。ささやかな善意ということと  
子を肩にもたせたという具体性を頂いた。

旅情いま同じ鼻緒で街に出る 酔夢

鼻緒など何でもよろし宿の下駄 八郎

宿の下駄の句も数多くあったがこの二句に  
しばった。『同じ鼻緒』『何でもよろし』の  
語がすぐれていると思ったからである。

噴水へ棕櫚の鼻緒が風情をえ

温泉の風景であらうか棕櫚がよかった。

すげ換えるチャンス鼻緒を派手にする湖平

素直さが身上という句である。

雪駄の鼻緒もきりりと棟梁が来る 徹也

色々の履物があったが雪駄の句はこれだけ  
であった。雪駄と棟梁が面白い。

ほこりの鼻緒どこやら金の色 古方

片岡つとむ著

句集「沓の音」——奈良百五十句

風鐸に風のある日の法隆寺 つとむ

発行所 奈良東寺林三八・奈良市役所内

奈良 番傘川柳会

故河田春草・瓦本ユキ・前川千津子

合同句集

「原色」 箱入美本・二百十一頁

定価 五百円（送料共）

相元紋太氏の序、鈴木九葉氏の跋、また

著者それぞれのあとがき、すべてが温く

気持よい句集である。

発行所 神戸市長田区水笠通六丁目

一の七 前川千津子方

ほんぼり川柳会

鼻緒そのものを詠んだ句である。私の旧作  
をお目にかけたい。

夜の素足細い草緒が締めすぎ 白柳

七月号発表・締切五月二十日

研究題「味」 五句以内

八月号発表・締切六月二十日

研究題「ポスト」 五句以内

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇

清水 白柳

# 明治川柳と

## 風俗 (11)

奥津啓一朗

### 瓦斯灯

明治三年、横浜市では仏国人ベレレン氏を聘して、同市花咲町に製造所を建設、同五年九月ようやく市中に点火した。かくて日本最初の文明の灯（ともしび）は横浜市民の頭上に輝やいた。

この瓦斯灯が東京に点火されたのは八年で、横浜より三年も遅れている。まず京橋から万世橋、常盤橋から浅草橋の大通りに点灯、鑄鉄の柱に角形の瓦斯灯がばつと明るく、行人の眼を驚ろかせた。それから銀座や上野方面に延長されたといわれている。

瓦斯灯の夜番をやもりあひ務め  
瓦斯灯のヤモリを柳撫でてゐる 柳 野郎  
瓦斯灯を踏で通る道普請 薦 雄  
瓦斯灯を除けて二人は裏へ外れ ○ 丸  
瓦斯灯をあびて桜の白く浮き 古 雅  
邸町瓦斯から瓦斯は莫として 啞 醉  
竹竿の先に口火のついたのを肩にして、  
点火夫が一つ一つ点火して廻つたのだから  
随分大変なことだったと思う。  
点灯夫忙がし相にツツ走り 蛸 助

蝙蝠が出ると点火夫駆け出し

文 象

夕刊の跡を追って点灯夫

劍 珍 坊

点灯夫義理丈の火を点けて行き

五 葉

点灯夫口から抜てつて降り

花 の 介

点灯夫錐を揉み込む様に拭き

電 象

その後軒灯の方もそばや式の行灯時代が  
去つて、十五六年頃から角形の軒ランプが  
現れ、これも点灯夫が脚立を持って一軒一  
軒つけて廻つた。やがて場末まで行きわた  
り、おかげで横町の溝にも落ちずにすむよ  
うになった。

ガスに寄せて縋振る君の老けたる眼

青 明

明治三十二年理学博士田中正平氏が瓦斯  
マントルを考案し、更に改良を加え、三十  
四年に「アポロ」と命名せるものを作りだ  
したが、その後一切の権利を助手の源知太  
郎氏が譲りうけ、浅草松葉町に工場を設け  
企業化し、東京瓦斯株式会社ではこの「ア  
ポロ」を「金星印」として販売するようにな  
った。

田中氏のこのマントルはラミールを原料と  
したものであったが、京橋区山下町で電球  
製造をしていた大野虎之助氏は、この瓦斯  
マントルの有望なのに着眼、三十七年末に  
綿糸を原料としてマントル製造に成功、四  
十一年には芝区白金三光町に工場を設け之  
に移った。少年の頃、このマントルに火を  
つけたのが面白くて、夕方になると火が待  
つけすぎで、時にはマントルを崩してひどく  
叱られた記憶がある。

### ★川柳塔社常任理事会

第三回常任理事会が四月四日午後六時から  
本社楼上で開かれ「路郎忌川柳大会」がきま  
る。（表紙の◎参照）

本社としては第一回の川柳大会なので、な  
んとか皆さんのご協力で盛会にしていだき  
たい。うちは「川雑」時代から、宣伝はあま  
りうまくないので重ねてよろしく願ひいた  
します。

今月は欠席三名だけという熱のこもった会  
合だった。出席―白柳、古方、好郎、静馬、  
圭井堂、生々庵、すゝむ、形水、柳宏子、小  
松園、文秋、いさむ、栞、多久志、一三夫諸  
氏。

品質優良

タチカワペン



タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社

靴ベラ

山田季賛選

靴ベラにまで商魂の名を刻み  
靴ベラも貸すサービスの靴磨き  
梯子酒ポケットに靴ベラ残り  
値切っても靴ベラ添えただけ靴  
靴ベラは要らず和服の好きな人  
ウイंकも添えて靴ベラ手渡  
靴ベラの主がみな履くまで待ち  
あわてもの靴ベラも人に借り  
寝すごした日の靴ベラが見当  
靴ベラがお角力さんを持て余し  
雨続き靴ベラ今日も用はなし  
靴ベラへ昨夜の酔いがちと残り  
靴ベラを貸して貰ってからの仲  
靴ベラを持たぬ靴だとよく解  
靴ベラの要らぬ気安さ歌で出る  
次の駅降りる靴ベラだと解り  
靴ベラは一生いらぬ職で生き  
進学へ靴ベラ希望の朝を発ち  
靴ベラの指紋へ捜査の手が伸び  
朝帰り靴ベラだけは知っており  
遭難の身元靴ベラからわかり  
靴ベラで器用に栓を抜いてくれ  
マイペース靴ベラ過ぎたと思ふ酔

李朋 勝子 章雅 秋月 文平 光代 千郎 ろ亭 宗太郎 金三 雄声 芳仙 弘峰 不水 不朽 甦光 清泉 芳子 正朗 鶴丸 十九平 策柳

靴ベラに鍵結びつけ共稼ぎ  
靴ベラの釘打つ場所に新居もめ  
靴ベラがしまいかまれても不満  
持主のない靴ベラが出る掃除  
退院の朝靴ベラへからり晴れ  
靴ベラで仲々履けぬ酒に酔い  
靴ベラを出せば父ちゃん抱き  
靴ベラのついでに結ぶ靴の紐  
くさい足に今日も靴ベラつか

佳

靴ベラを落した音で振り向かれ  
靴ベラで納めた足を靴が喰い  
靴ベラを忘れて母のハガキ折る  
靴ベラを出して別れをまだ惜  
靴ベラも身の上話聞いている

人

靴ベラにもさき切符の旅を終え

地

靴ベラの質に貧富の差を見出し

天

靴ベラ落ちてかかと踏みつぶし

軸

靴ベラの要らぬボロ靴履て出る

注 射

中島小石選

惠二朗 隆子 旭峰 露声 虹次 要次 千翁 魚山 古方 水客 井蛙 野迷路 愛鳩 初甫 静水 七面山 古方

癌だとも知らず注射をせがむ妻  
注射する腕をまくって見構える  
注射こわがるわんぱく囃うお  
痛かったかいと注射の列が訊き  
注射とは別にクロコまで呑んで  
注射してもらっただけで治る気  
注射針所詮は無駄と知りながら  
流感の注射に白衣小童  
唇が注射のきいた色になり  
ひと通り聞いて注射をしても  
ヒロポンの顔が検査に無表情  
面会謝絶リンゲルの日が続き  
注射針みたいに皮肉つきささり  
ホルモンの注射委には内証です  
看護婦の恋を見つけた注射針  
信じられ信じる注射に通いつめ  
注射さえすれば気のすむ子煩悩  
注射できめん市況活気帯びはめ  
リンゲルの一滴一滴に身を切られ  
注射嫌いが予防注射の日を休み  
関取の腕へ注射器小さすぎ  
注射馴れた児の顔の青白し  
胎ろす気の注射へ悔の目をとど  
予防注射に風邪は抵抗試みる  
回生ののぞみ注射にかけ打ち  
まな娘に育ち注射の世話に  
注射する前に病気を重く云い  
世直しの注射も効かず物価高  
注射針シーエーと逃げ廻り

千代 文平 八九郎 光亭 亜也 代仕男 繁太郎 愛鳩 隆史 李朋 同 健太郎 醉夢 弘朗 初甫 同 十九平 千翁 七面山 魚山 千久良 芳子 清泉 白汀 野迷路 釣月 秀峰



吟 題 課

注射にもなれて病床又極  
浮気せん注射先生おまへんか  
血管をさぐる注射の針非情  
佳 切らんで治る注射を信じ切り  
注射までもうって招待酒を飲み  
注射より禁酒の方が身にこたえ  
一本の麻薬が人生狂わせる  
昆虫の厄日注射針突込まれ  
是非会得子<sup>おかり</sup>カンフル打<sup>うち</sup>ちうが  
予防注射泣く児わめく児犬舎々  
社会戯評日本が注射されていた  
賢くなる注射漫画にありました  
注射にも馴れて実験室の猿

人 かたくなに注射ぎ<sup>い</sup>で来た米寿

地

往診だ注射だなどと犬のこと

天

一年生注射のあとを比べ合い

軸

点滴の輸血いのちの火を灯し

交 際

長野文庫選

交際は無かったことにして分れ

秀峰

凡九郎

真一

春己

静水

素身郎

秀峰

芳仙

季賛

井蛙

恵二朗

古方

同

同

同

章雅

春己

可住

交際を断わる理由に父を借り  
妻同士同窓と言うおつき合い  
交際の広うなるのが恐ろしく  
つき合って見たらと昔風の母  
つき合いは下手で頼りになる男  
奥さんと母ちゃん趣味<sup>きずみ</sup>つき合い  
交際をしたらと仲人知らぬらし  
荒波にもまれ交際角がとれ  
交際もほどほどにして小金貯め  
近所とはつき合ひません小金貯め  
交際が深く無心が断われず  
交際の下手誠実を買われて居  
儲かればいいんでしょと交際費  
美しい交際レター母に見せ  
子の代になおも交際引つがれ  
この人と交際してると連<sup>つ</sup>て来る  
交際が派手なほどには案でなし  
家計簿の赤字へしまる交際費  
交際は上手家庭は火の車  
交際の範囲縮めて引退し  
子供同士が友達やむなく交際し  
下心ある交際とわかって来  
どこでどう儲けて来るか交際家  
交際費汚職の点までさぐられる  
交際をして見給えと云う理解  
金貯めて交際一人二人減り  
交際の相手が減ってゆくも年  
見栄はりの交際贈答くり返し  
割勘する交際がまだ続き

千代 千風 曉方 古己 春男 晃男 宗太郎 奇童 繁太郎 代仕男 信二 愛鳩 芳仙 どんたく 静水 幽谷 蘭幸 白汀 初甫 鶴丸 素身郎 虹柳 筑柳 隆子 恵二朗 露声 魚山 光郎 千翁

やればすぐ返すお方の水臭さ  
隣りとも交際をせぬ変り者  
佳 名刺持つて程に交際広うなし  
金借りて来て交際にひびが入り  
交際へうわさるさくつきま  
交際費税務署根堀り葉堀り聞き  
交際で理解し合うたゴールイン  
交際も落目になって遠ざかり  
人 交際のきつかけとなる雨宿り  
地 三代の交際身内とも思い  
天 交際はなが議員として花輪  
軸

要次 七面山 凡九郎 春雄 清泉 章雅 井蛙 代仕男 初甫 不朽

橘高薫風著

句集「れもん」

定価 五百円(送料共)

浜田久米雄著

句集「凡人」

定価 三百円・送費五十円



第百八十回 (新年度第八回目)

大萬川柳

兼題「耳」

入選発表表

選者 清水白柳  
 投句総数 六百六十二句  
 入選 七十九句

米子千代

ひと言が脈を打つてる耳の底

島根李羅

赤ちゃんの産湯へ耳を押さえられ

岡山秋月

部下の愚痴すなおに聞ける耳が

泉北釣月

その話聞く耳持たぬ人が聞き

出雲健太郎

耳打ちに社長のピンチ救われる

堺亜也

することは半端なくせに地獄耳

島根正朗

耳だけは達者寝ながら指図する

広島松風

いいことを聞くらし耳がかゆく

島根芳子

返事するだけでも耳からは抜けて

島根代仕男

郷愁を耳の底から叱る父

加賀味平

耳たぶを引っばって行く飲み直し

大阪旅風

右左眼鏡かたむく耳の位置

大阪双楽

耳にたこ出来て講道館の花

堺一舟

しょうむないことおぼえ地獄耳

笠岡白梅子

全身を耳に安否を聞くマイク

堺圭井堂

この耳でしかと聞いたと承知せず

大阪弘生

耳学問に合槌打ってよろこばれ

神戸どんたく

馬耳東風とうとう匙を投げた父

山口弘道

謎かけりや恋は耳から赤くなり

大阪野迷路

パンの耳捨ててむかしを意見され

岡山十九平

こだま聞く手を子の耳にあてて

篠山可住  
 雨の日の孤独は耳にしみとおり

倉敷千翁

そう言えば耳に挟んでいた話

加賀光郎

耳に跡くつきりひる寝の籠枕

大阪あいき

ほめどころなくて福耳はめておき

石川宗太郎

ブルドッグ耳の先きから目をさし

大阪春果

末席で聞き耳たてていて酔えず

和歌山木魚

夜業してかえる夫を耳で待ち

大阪小松園

病人の耳が夜中の雨を知り

大阪雄峯

手も首も耳も飾って嫁きおくれ

大阪明子

きき流す耳で目玉がよく動き

京都旬楽坊

耳よりな話もやはりもとが要る

京内吸江

誘惑の声よみがえる耳を覆い

南河内

イヤリング耳のうぶ毛を剃り忘れ

豊中古方

片方が聞えますには恐れ入り

大阪柳志

目のやり場耳に逃げとく初対面

大阪梅里

父の描く兎の耳はぴんと立ち

五月の句会

南大阪川柳会

時 二十日(金)午後六時

忠実・スマート・ゆれる・時代

所 アベノ区松崎町三ノ一〇

大萬

奈良凡茶

耳に口寄せて内緒を見せつける

倉敷素身郎

聞いてますがなと妓耳掃除

反対論耳学問の域を出ず

聞き耳を立てたとたんに電話鳴り

児島恵二郎

目も鼻も耳も笑うてうまがあい

大阪痴亭

耳よりな話へ鼓膜ぴんと張り

大阪阿茶

耳たぶが自慢でリングなどつけず

大阪阿茶

紙の耳つけて園児ははねまわり

富田林美房

一応はお耳に入れておく顧問

大阪柳志

耳だけは起きてる春の日の講義

大阪柳志

国訛り失意の耳にあたたかし

大阪梅里

耳よりな話へお茶をかえにくる

大阪梅里

長生きにあやかりたいと耳をほめ

悪口が聞こえる耳で邪魔がられ

門 真 鉄 児

耳よりな話になって声が落ち

耳打ちが満座の視線集めてる  
頑固さはおのれの耳を信じきり

松 原 万 年

耳そうじ頭乗せなと膝をさし

耳が痛い話ですなですましとり  
耳打ちを素知らぬ振りで落ちつ

大 阪 文 秋

たわいない内証をママが聞いて

火傷した熱さを耳がうけとめる  
聞く耳はあって覚える脳がなし

布 施 清 人

酒臭い息になれてるイヤリング  
耳に手を添えて工事場上下

# 雅号ぶっちゃけばなし

む き



・小 西 無 鬼・

(13)

君嗤い給う事勿れ。無鬼なる文字は、  
鬼は無いとも、鬼で無いとも読む人の勝  
手である。語れば古い事なら雑誌社へ投句するに  
ついて何かよい号を考えた末、姓(当時の)広  
瀬を広い世間ともじり「広い世間に鬼は無し」と  
云う事で、広瀬無鬼と号したが、養子になつて意  
義が無くなったのと死んだ時無鬼居士では、生前  
鬼のような奴だったなど後世に誤解されては困  
るので、改号を柳友に相談したら、永年無鬼で親  
しんで来たので「無鬼」が矢張りよいと云う。で  
そうムキになる事もないと思ひ現在に及ぶ。雅号  
の由来如依件。

煙草小売と  
書店経営 六十一才

餌くれる音聞きわける犬の耳

大 阪 水 客

耳に手をやって年寄りうまがあい  
耳貸してくれと迫従めいてくる

耳打ちへまだ腕組みをくずさない  
小金貯めで勝手つんばな耳を持ち

五 客

愛をささやく片方の耳にジャズ  
居眠りの耳を教師にひっぱられ

鳥 根 代 仕 男

あちこちで耳打ちやと開会し

ぬくい息耳にかけ込む子の内証  
大 阪 琴 女

大 阪 柳 志

病院からの電話へ子らも耳をよせ

人ノ句

耳打ちをされて主賓は座を外し

大 阪 柳 志

二人目が出来妻の耳遠くなり  
天ノ句

耳に手をあて末席へ聞き返す  
大 阪 形 水

耳をおさえて泣きながら切ねて  
大 阪 痴 亭

図書館を抜けてベンチで春の夢  
大 阪 柳 志

大 阪 柳 志

投句にご利用ください

柳

一冊 (50枚)

送 料

箋

三十 円  
二十 円

次ぎの兼題「免許」五句以内

五月の兼題「壺」五句以内

五月の兼題「壺」五句以内

五月の兼題「壺」五句以内

五月の兼題「壺」五句以内

大 阪 柳 志

(四月現在)

一 水 客 二二〇大 阪

二 柳 志 一九五 大 阪

三 梅 里 一八五 大 阪

四 好 郎 一八〇 南 河 内

五 清 人 一六〇 泉 北

六 美 房 一五〇 布 池 北

七 阿 茶 一四〇 富 田 林

八 万 竿 一二五 大 阪

九 可 住 一二五 大 阪

一〇 桃 里 一〇五 大 阪

一一 木 魚 一一〇 和 歌 山

一二 凡 茶 一〇五 奈 良

一三 没 食 子 一〇五 大 阪

一四 文 秋 一〇〇 大 阪

一五 宗 太 郎 九五 石 川

一六 惠 二 郎 九五 鳥 川

一七 静 馬 九五 高 槻

一八 春 馬 九〇 大 阪

一九 静 馬 九〇 大 阪

二〇 春 馬 九〇 大 阪

# 柳 界 展 望

あちからこちから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

☆霞乃先生から「川柳塔うれしく拝見しています。生々庵先生はじめ皆様のご苦勞感謝しています。去年の十一月から奈良生駒で蟄居生活をしております。自分の健康をあまり過信していませんので神様に鼻柱をくじかれた恰好でございます。まだ一人歩きに自信がございません。〓神経痛にくき寒さへ桜咲く〓戸じまは猫の点呼がすんでから

☆「時の川柳」編集部の間①あなたはなせ雲の句ばかり作られますか。②課題吟とどう違うのか。など③答えて葵徳三氏は、「①作品というものをある程度自縄自縛に置きたいのです。ともすると野心的になり奔放にする点を自分で制御しうとする点です。従って

いつの場合でも未完成であります。毎月及びつかない自分の能力の弱さを反省しています。(略)テーマに縛られているだけのおのこと深刻に自省ができると考えています。〓雲〓は本年度で四年目、計二一八句です。快心というものは残念ながらありません。②自分では題詠を作るといふ気持ちをもっておりません。あくまでもオリジナルでありたいと思っています。(略)

☆私が「雲」をテーマに組んでいるからといって句会あるいは誌上募集吟で私の選の場合〓雲〓の作品は目立って多くないでまいりました。私はできるだけ敬遠をすることにしています。(略)〓

書館で開催。兼題、ひらひら・レンタカー・週末・市民・二年目、投句は百円封入の上十日迄に名古屋市中区新栄町八丁目安藤了宛。

☆三条東洋樹選暦記念句碑建立並びに川柳大会が五月二十二日十一時から神戸市平野、祇園神社で開催。句碑建立賛助金は一口五百円神戸市兵庫区矢部町九竹内出樹太方東洋樹句碑建立委員会へ。川柳大会兼題はひとすじ。月日・酔う・働く・見栄。

☆番傘わかくさ二十周年記念川柳大会は五月十五日正午から大阪南区安堂寺通二、大阪写真会館で開催。兼題、人並み・ムード・希望・窓・うたがい・スリル・妥協・余技・近江砂人・生島島語両氏の講演がある予定。

☆第十二回愛媛県川柳研究大会は五月十五日午前十時から新装の今治市民会館ホールで開催。兼題は電話・港・口下手・流れる・ほどど・ノイローゼ・モコ(喫茶店名)・母恵夢(銘菓名)、後者二題はコマレシヤル川柳とあり、投句は七日から百五十円封入の上、今治市港町八丁目潮風川柳社大会係宛。

☆第二回さいたま川柳大会は五月二十九日午前十一時から与野市向原公民館で開催。兼題、それから・鋭い・むだ足・マニア・青・活路各題二句、投句は百円同封の上、埼玉県与野市下落合一二五柿沼考人宛。

☆川柳さっぽろ百号記念昭和四十一年度知事杯争奪誌上川柳大会は兼題、浮き沈み・師弟・真剣・重ねる・ばりばり・仲間・結ぶ・繁栄・飛躍・生命・頑張る・雄大、各題別紙紙十八センチ横七センチ角箋に住所氏名雅号を明記、五月五日までに札幌市北二十条東四丁目(美香保公園管理所内)沢田好宛宛。投句料二百円発表誌の希望者は七十円追加のこと。

☆第三回土佐市民展川柳大会は三月十三日正午から土佐市宇佐町ホテル横浪荘で開催。

☆石曾根民郎氏(松本市)を中心とする「しなの川柳社」同人の参加で、「川柳四十年」が三月十八日午前七時十分からSBCテレビで放送になった。

☆鷹果一子さん(東京都)から、「川柳塔いつもお送り下さいまして厚く御礼申

玉造川柳会(大阪市)  
時5月10日(火)午後六時  
題アルバム・ぬる湯・後六時  
所 玉造交差点南一〇〇米  
大阪信用金庫階上

南海電鉄川柳会  
時5月19日(木)午後六時  
入場券・女・こころ・  
題八割 高架下  
所 ナンバ 新和クラブ

上げます。川傍柳をよみながら、なんだかたまらな  
い思いで涙にくれます。啞  
三味が机に向って一生懸命  
にペンを走らせている姿が  
目に見えて淋しい感じが  
します。

☆阿部佐保蘭氏(東京都)  
から、「三月二十日堀口大  
学先生を訪ね来春出版予定  
の拙著「川柳とホンヤク」  
の序文の快諾を得ました。  
川上三太郎先生には先に快  
諾を得たのでしたが、その  
時、霞乃先生の英訳川柳を  
大層褒めておられました。  
霞乃先生のご快諾を祈りま  
す。〓また、氏の主宰する  
俳諧かもの誌上、故路郎  
先生の書翰をまとめた書翰  
集を連載される由。



☆和氣川柳会(岡山県)では役員を次のように決定した。会長杉原胡風、会計延堂あきら、渉外近藤笹舟、企画藤原知水、編集長瀬山文平、顧問、浜田久米雄、横山一声、沼田三六諸氏。

☆小池鯉生氏(浦和市)は相も変らぬ病気の問屋、今度は賢蔵結石手術のため慶応病院に入院したため、一手術室燦爛として奈落なし」の句信を寄せられた。

☆村山光輪氏(大阪市)は三月二十日母堂の追悼茶会を南御堂でかけられたが、氏は活け花の師匠、小唄の名取でカメラもプロ級という多趣味な川柳人である。

☆山田季賛氏(高槻市)は三月十二日ふあす句会へ出席、お水取行事を見学にふあす旅の会と同行翌日のお水取り句会に出席



☆橋高薫風氏は三月十九、二十日の両日、大山、皆生温泉、松江、大社と巡遊、大陸の黄塵のまじった大山の茶色い雪と、殊に千鳥城には大いに感銘した。グループの旅で川柳人との交歓時間が持てず残念だった。

# 新同人紹介

清水 義介

白柳、文秋推薦

長谷 沢 義 英

庸佑、一三夫推薦

☆豊中川柳会恒例の花見句会は四月十五日服部緑地サボテン園で開催。

☆江国園谷氏(岡山県)は年休の一日を基石を石礫水で洗い、みがきをかけ、盆裁の手入れや桑の木で茶机を作り、その周囲を令孫がつき切りで楽しかったとのこと。久米雄氏のように早よ公務を退けば大阪へもちよいちよい行けるのにとのお便りがあつた。

☆清水一保氏(鳥取県)は烈しい選挙戦をおえられ、最近やっと人間らしい生活にかえったとおたよりがあつた。大山も晴れて勝利を賛え呉れ。一保。

☆菊沢小松園氏(大阪市)は町会有志のアベック会で南紀白浜へ一泊旅行をされ快晴快適とお便りがあつた。花の風人のころのうちを抜け小松園。

☆北川春果氏(大阪市)は福岡の内科学会総会に出席太宰府で文運長久の祈願をされたが、雑念が多く、句が生まれなかった。さくら満開の四月二日福岡にて☆河本南牛史氏(松山市)毎月柳誌中第一着に感謝。現在、関本柳剛氏と二人だけ、そのうちに購読者をふやすという力強いおたよりをいただいた。

☆山川勝子さん(高知県)は愛媛と共に四月四日米阪の寸時を山川阿茶さん宅を訪問、柳談の花を咲かされたが、77歳の高齡とはおもえない若さに、20歳は若く見える阿茶さんのほうが驚かれたとのこと。

☆福田丁路氏(高槻市)は三月三十一日を送って四十有余年の公職を去られ、椿栽培などの花造りに楽しい日を送って飛び起き笑われる。丁路。

☆高橋操子さん(岸和田市)は盲腸のため入院加療中とのこと、一日も早いご退院を祈ります。

☆波辺曉章氏(愛媛県)は三月二十七日、中国、四国対象のNHKの瀬戸内をむすぶ海の風土記大島」の紹介を十分間放送された。なお曉章氏が担任の簡報「よしうみ」が百三十四号を迎え県のコネテストで三年連続入選された。

☆不二田一三夫氏(大阪市)は愛媛河井庸佑氏と共に三月二十一日、京都標語大会に出席、全国の強豪をしりぞけ堂々優勝権を獲得された。なお一三夫氏が所属する関西標語作家連盟の作家が多数川柳家へ参加されている。

☆高津徹也氏(大阪府)の敬父勇氏は二月二十七日午前十時、心筋硬塞で急死された。川柳父子として、かつてはよく本社句会にも出席されていたが、紡毛界において勇氏は近年海外出張などで多忙な日を送っておられた。謹悼。

☆石原伯峯氏(広島市)の新住所「広島市牛田町国鉄アパート六二三(第六棟2階東より3番目)

やすという力強いおたよりをいただいた。

☆山川勝子さん(高知県)は愛媛と共に四月四日米阪の寸時を山川阿茶さん宅を訪問、柳談の花を咲かされたが、77歳の高齡とはおもえない若さに、20歳は若く見える阿茶さんのほうが驚かれたとのこと。

☆福田丁路氏(高槻市)は三月三十一日を送って四十有余年の公職を去られ、椿栽培などの花造りに楽しい日を送って飛び起き笑われる。丁路。

☆高橋操子さん(岸和田市)は盲腸のため入院加療中とのこと、一日も早いご退院を祈ります。

☆波辺曉章氏(愛媛県)は三月二十七日、中国、四国対象のNHKの瀬戸内をむすぶ海の風土記大島」の紹介を十分間放送された。なお曉章氏が担任の簡報「よしうみ」が百三十四号を迎え県のコネテストで三年連続入選された。

☆不二田一三夫氏(大阪市)は愛媛河井庸佑氏と共に三月二十一日、京都標語大会に出席、全国の強豪をしりぞけ堂々優勝権を獲得された。なお一三夫氏が所属する関西標語作家連盟の作家が多数川柳家へ参加されている。

☆高津徹也氏(大阪府)の敬父勇氏は二月二十七日午前十時、心筋硬塞で急死された。川柳父子として、かつてはよく本社句会にも出席されていたが、紡毛界において勇氏は近年海外出張などで多忙な日を送っておられた。謹悼。

☆石原伯峯氏(広島市)の新住所「広島市牛田町国鉄アパート六二三(第六棟2階東より3番目)

やすという力強いおたよりをいただいた。

☆山川勝子さん(高知県)は愛媛と共に四月四日米阪の寸時を山川阿茶さん宅を訪問、柳談の花を咲かされたが、77歳の高齡とはおもえない若さに、20歳は若く見える阿茶さんのほうが驚かれたとのこと。

☆福田丁路氏(高槻市)は三月三十一日を送って四十有余年の公職を去られ、椿栽培などの花造りに楽しい日を送って飛び起き笑われる。丁路。

☆高津徹也氏(大阪府)の敬父勇氏は二月二十七日午前十時、心筋硬塞で急死された。川柳父子として、かつてはよく本社句会にも出席されていたが、紡毛界において勇氏は近年海外出張などで多忙な日を送っておられた。謹悼。

☆石原伯峯氏(広島市)の新住所「広島市牛田町国鉄アパート六二三(第六棟2階東より3番目)

やすという力強いおたよりをいただいた。

疲れに!

アリナミンFにBe・B12を配合

**アリナミンA**

神経痛・便秘・心臓病にも

# 本社四月旬会

会場・自安寺

41・4・8・午後六時



三月には平安川柳社の入仙氏がご出席。先月にはひきつづき「せんば」の御大宣介氏も顔を見せてくださったので活気横溢した旬会になったことはうれしいきわみであった。  
さて、四月旬会は花見月だったが、ご覧のとおり、盛会で旬会部をよろこばせてくださった。

三月の戸田古方氏の柳話も好評だったが、川村好郎氏の柳話は大受けだった。

好郎氏の少年時代の追憶談だが、小ぼんちやんの愛称で登場する梅里氏や、生駒トシネルの出来たころのはなしなどを氏独自の舌に乗せて会場を明るくするあたり流石である。  
今月は新しい方が二、三見えられた。新聞広告ではじめて旬会出席という人もあった。ありがたいことである。こういう人たちに心やすく話かけるチャンスをつくりたい。  
最近では女流作家の進出が目立ってきた。これも好材料である。六人に一人という花やかさである。――八時四十分閉会。

(河井庸佑整理)

出席――三夫・薫風・与呂志・凡九郎・淡

舟・加仙・静馬・柳志・水客・あきら・よしを・双葉・誓二・鳥荘・照一・醉升・白柳・圭井堂・花梢・すみれ・白溪子・野迷路・きさ子・千梢・八郎・飄太・文秋・水京・いさむ・専翁・滋雀・露芳・好郎・柳宏子・一舟・清人・静歩・鋭祐・潮花・多蘭子・小松園・形水・栞・弥生・金三・季賛・雄峯・あいき・葛城・宏子・一栄・吸江・梅里・春己・古方・舟遊・生々庵・たつみ・眉水・庸佑・志朴・有子・凡子・すゝむ・葉子

席題「スモッグ」 児島与呂志選

スモッグの上で太陽光つとり  
スモッグになれて都会の人となり  
情報が出て煙突もくもくと  
スモッグで鼻の穴まで黒うなり  
スモッグの空から派手にピラを撒き  
スモッグの中でも我が子差し上げる  
スモッグに負けぬ植え替える  
スモッグ機の音スモッグの空を抜け  
通天閣スモッグで見えず空は損  
スモッグ模様眼科医よくはやり  
トンネルを出たら大阪の空の色  
庸佑 宏子 圭井堂 葛城 白溪子 水客 清人 誓二 一三夫 春己

スモッグへ時計も一度たしかめる  
共稼ぎスモッグなどにかもとれず  
スモッグに火葬場の煙まじり  
スモッグの中へ観光バスが着き  
スモッグに馴れて青空まぶしすぎ  
スモッグにお宮の鳩も羽ばたかず  
スモッグのすき間ライトでる走り  
スモッグのない明け方の月は澄み  
スモッグによれた鼻毛も都会人  
スモッグも肺癆もあるが金儲け  
スモッグで小鳥も時間を狂わされ  
スモッグに赤い顔した都会の月  
スモッグへ母早々に帰郷する  
スモッグへ無声映画のような街  
工場と一緒にスモッグまで誘致  
大阪に生まれスモッグ吸うて生き  
情報を出しても青空出てくれず

席題「取巻き」 樋口舟遊選

デマ一つ取り巻き連がよう消さず  
誰よりもとりまき連に惜しまれる  
取巻きが山程居って粟が割れ  
人気も下火と取巻き知つている  
取巻きとも言われ懐刀とも言われ  
側近の語る処で記事になり  
つっぱりにならぬ取巻き持て余し  
金の取り巻きと知つておぼろさ  
取り巻きが居る警察も手が出ず  
取り巻きに聞けば先生左前  
うさ晴らし程度に取り巻き聞か  
自惚れをあふり取り巻き酒にする  
取り巻きが勝手にワイワイ言

潮花 静歩 水京 きさ子 柳宏子 柳宏子 露芳 弥生 あいき 野迷路 一三夫 滋雀 清人 潮花 柳宏子 照一 与呂志 千梢 水京 静歩 きさ子 葉 柳宏子 一舟 あいき 酔升 淡舟 与呂志 白柳 柳宏子



大さういふ石をポッケに千鳥足石ブーム墓石さえも盗まれる石蹴りの遊び都會えて締め出されまてつづの石へゼロが多過すぎる石段をバックに鹿と写されるハイキング石で囲んだかまど出来石集め沢庵石もまじってたねこめ石市場通もい手に光り変てつもない石拜がむ手の不幸石ブーム笑つてた人が集め出し捨て石になつて男の義務があり宿かりの小石を越える努力がしり金持ちが持てぬの海を恋しがり石拾ちが故郷のと見えぬ石ハイキングただでかえぬ石ブーム給料と同じ値段の石にあり墓石へその家柄が偲ばれる石段の数に下から拝んぶき石一つ置いて小鳥のお墓です六段の調べが敷石越えてくるいら立つた足は小石にまでぐせりし段の隅とは知らず根を下ろし景色より石が目当りリキックも獲物なく石拾ろて来た釣がえり

金好柳葉形圭淡柔一淡水舟一水靜野い梅庸文瓢馬水千凡一古滋い水  
三郎小松園子井堂舟舟舟客遊榮京歩路さ里佑秋太一客梢郎舟方雀む客

拾われて漬物石になろうとは  
墓石打つ音もめつきり春らしく  
基石の苔を誦めめつきり春らしく  
打ち明けて見てても石なら語るまい  
石にこけ生やす気なのが楽福居  
PTAきょうはうたいながにかき出る  
石ころを蹴り蹴り帰るランドセル  
百度石奇蹟を信じまじめなり  
物好きが京まで石を撫でに行き  
石海にながても恋にとこなない  
うつぶなをこめて小石はほととぎす  
石蹴れば空しさだけが残るなり  
さげて見て未練な石を誦める  
芋ほどなりユックヘブムの石を人  
皮算用うんうん石を持って去に  
石段のひとつひとつに母達者  
石噛んだ夫へ妻の目が詫むる  
水うてば石は生氣ある如し  
何を売るつも香具師は石を立て  
もの言わぬ石を眺めて気をやすれ  
石庭を賞めて本尊忘れられ

兼題「人出」 菊田い

死んだ子に似ている人をみた人出  
陽春の人出目当てに弾く軍歌  
デパートへ人出を交えた春の雨  
くり出した人出へ桜三分咲き  
人出を待てましたとスリ稼ぎ  
ロープ一本人出をさばく右左  
賽銭を頭にうける人の波  
今日の人出へ温ゴタを撮さる  
人出避けて来た温泉のぬるいこと  
天王寺亀もあきれている人出  
スピーカーで迷子知らず人出  
深紅の優勝旗人出に囲まれる

照梅一静榮野た誓潮花旅秋  
一里学馬迷つみ二花宵風月  
む選  
静千柳榎春水古一圭潮庸舟柳水滋庸双小柳淡滋  
馬梢志己客方夫堂花佑遊志京佐佑樂園宏子雀

ヘリコプター入出を繰のよと見る  
スリの目が光る 入出の特売場  
行楽のレコードとなった古都の春  
鳩のえさ入出の程は売れていず  
お彼岸の入出へしかと老母の手  
けが人を出した入出の人気歌手  
バグス降りてきた入出に呆れ果て  
緑日の入出に孫の手握りしめ  
けが人も迷い児も最高と言う入出  
団体の旗も入出に見えなくれ  
中日の入出へ引導 鐘響き  
まじろは文無しテレビで見る入出  
お彼岸の入出テレビで見せてくれ  
晴着魔がまた出たらしいこの入出  
汗だくで入出を捌く花の駅  
だらけ入出や財布にぎりしめ  
橋筋の入出に礼装少してれ  
入出どっと値上ブームへ繰り出した  
往復は賃切り 目的地の入出  
スリという貨切り 目的地の入出  
キップ持つ幹事をさがして入出  
ひやしあめの瓶にうつて入出  
おまつりの入出は鳩に見下され  
連休の入出を当てる ネタ仕入れ

兼題「耳打ち」 内藤 き

潮春幸花旅湖鶯花章眉柳一舟阿水生多醉梅一圭清文水水白野一柳栞双白  
花己雄宵風平二村雅水子選いさむ志きさ子三夫遊茶客庵志升里榮堂人秋京京柳迷路榮志栞柳



阿秋野好清柳加照好阿梅花好瓢花柳小潮専あきら葉阿喜静淡小松栞古白水鳥多  
三迷月郎人子仙一郎茶里村郎太梢志園花翁子茶仙步舟園方溪客莊あきら  
夫茶月郎人子仙一郎茶里村郎太梢志園花翁子茶仙步舟園方溪客莊あきら

堂選 秋月 繁太郎 柳宏子 古柳 潮花 葛城 双雀 滋養 章太 梅里 眉水 瓢箪 一松 梅舟 春己 白溪 すみれ 静馬 一ツ 阿茶 きた子

幸秋章湖旅花 圭一專靜柳水花凡柳生加柳誓一一金庸雄好好葉水よ八金多  
雄月雅平風宵 井井榮翁馬客梢志庵仙二夫榮三佑峯郎郎子客を郎三三志





# 各地柳會

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

## 南大阪川柳會

金井文秋報

あぶれたら血を売る人のある政治  
子沢山強くて安いのを漁り  
怪しいと見れば向うも振り返り  
親切な私服家出に怪しまれ  
未亡人生きるおしやれを疑われ  
スリ今日は稼ぎ忘れた花見する  
いつにない土産を妻に怪しまれ  
非常口いざ本番に忘れられ  
僕の血が確かにまじる子の寝顔  
実用にならずともよし消火栓  
偶然というは怪しい出会いよう  
実用を説いても華奢な方が売れ  
ガラス切るときダイヤ実用と化す  
人間の欲が広さを忘れかけ  
新婚に鍋と釜とを祝われる  
徳用という大箱を重く提げ  
素人とみせるおしやれに汗を拭き  
欠損のあげく税吏に怪しまれ  
犬吠えて怪しい影が動き出し

阿茶 梅里 柳宏子 静馬 柳志 鉄児 文秋 滋雀 恭郎 白柳 金三 集一 古方 八郎 梅明 恒志 東紅 一栄

おしやれから遠く荷を背負い  
デザインにこって洗濯考えず  
バーゲンセール実用品だけ売ろう  
嫁の荷が出た日の広さ淋しがり  
血統がどうのこうのと犬のこと  
出血サービスそれで大きな行き  
おしやれしてどこか逃える人が出来  
お隣りの景気よいのを怪しまれ  
実用新家おりた頃には旧くなり  
アイデアをはめて品物買うてく  
世界地図広いソ連に見下ろされ

## 交通局川柳會

(大阪市) 児島与呂志報

もてもてで独占し気チツ切る  
腹の皮脂肪を独占して困る  
独占すればすればで肩がこり  
文句言うまい子供も僕に似て  
文句だけ云ってお金は貸さぬ肚  
裁ち方を聞けば鉄を貸しなはれ  
不倫の恋切れる鉄が見つからず  
母の愛独占ひ弱な子に育ち  
常連へ合槌ち鉄の音せわし  
おとこまえ作る鉄のリズミカル  
糊付けも鉄も要らぬブラモデル  
鉄置く音にも内職氣を使い  
文句言う楽しみがなし出来た嫁  
頼る子のありて余生は文句なし  
子の文句素直に聞いて父も老い  
末っ子の文句は鼻に汗をかき  
文句だけ並べて買わずに汗をた  
心配の種子を封筒へ保護者殿  
親は親子は子で悩む入試の日

凡子 あいき 千梢 吸江 痴亭 凡九郎 弥生 季雅 章雅 野菜 喜仙 春果 鉄舟 季賛 誓二 一乃字 孤舟 淡舟 正則 雅万 鉄児 松亭 一歩 雅果 胡蝶 三十四 六童子 与呂志

## 玉造川柳會

(大阪市) 西出一栄報

ゴム巻いて飛ばす飛行機に入  
受付の機転で社長留守になり  
受付の云うた通りに追い出され  
受付が首をかしげる程に瘦せ  
食事中受付の窓そつけないし  
同窓会先ず受付の派手な声  
染めるものつぎ鳴り出す電話  
切り出した母の打診へ頬を染め  
鴨川の水を濁して染め上り  
染め替への効かぬ身体を哀れとも  
生活への色がと妻にこまかれ  
友仙工指定の色に手が染り  
抽象画小首かした目を集め  
縞模様テレビ暫く待てと出る  
音楽が画面のムード盛り立たせ  
帯を解くところで画面は変えちまい  
幕切れをとんだ処でケチがつき  
杯の音へ幕も生命のあるごとく  
引幕をまごついっている学芸会  
緞帳の裏で掃いてる紙の雪  
紅白の幕から祝辞洩れてくる  
二幕目まだお隣りは空いたまま  
コップ酒今日の喜劇の幕終る

## 加賀川柳クラブ

野村味平報

お隣の喧嘩テレビを小さくし  
ウインクをされてあわてる旅の宿  
寒村の屋根より高く海が見え  
掛軸の一本もほし床が出来  
山の宿窓暗うして柿を干し  
尺八や琴よりエレキへ行く若さ  
衿巻をさがす寒むさがぶり返り

一栄報 照秋 一文 古舟 風仙 清子 三雅 一章 はじめ 恒明 柳宏子 静馬 滋雀 句念坊 八郎 金三 義介 凡九郎 寿美子 恭太 白柳 あいき 六童子 野村味平報 平路 雅雄 味郎 光平 魯羊 醉木



# 大鉄川柳会

辻 白溪子報

口喧嘩だまて良人送り出し  
母が膳についで祝宴始められ  
鉢植をゆづつて職場去つてゆき  
御手洗の底で十円玉かしまり  
送られて送つて二人の手の温み  
僕の時と同じ色紙をお祝いす  
お祝いと下しな横好し頃とて呉れ  
席ゆずる土工すこしも悪びれず  
島も春波の起伏をおくつてき  
健康の見本が笑うコマージュル  
すこやかに伸びよ植樹の鍬を振る  
老友のなのおすこやかに語り合い  
肩組んで梯子で祝う友があり

## 岸和田川柳会

和服の子帯のゆるみを泣きに去ぬ  
着こなしの流石マダムに隙が  
縫い上げの柄へ惚れ惚れ衣紋竿  
開幕のベルに未練を食へ残し  
ミスコンテストに出る心臓を  
心臓の波を押さえたよい便り  
お迎いの母来る頃を知る園児  
取立に責められ逃げるに逃げられ  
逃げ腰を見抜いてからの威張り  
かたまりフルスピードで逃げる気  
一通り着物も出来たし逃げる肚  
いつからか和服が似合う娘に育ち

## ウイロー社句会 (ハワイ) 快夢起報

高波のようにゴシップ飛んで散り  
ゴシップを尻目にお手盛忘れない  
バリカン音へゴシップ遠く聴き  
ゴシップのイメージと違う人社会

葛城 白光子 東天紅 三志郎 六竜子 夢遊 加仙子 武加助 好き子 起郎 人 北三海 三石山 舟

ゴシップにもならず吾が恋終り  
ゴシップへ女の弱さ身に泌みる  
老いらくの恋でゴシップ賑やか  
ゴシップが飯より好きな女にて  
悪らつなゴシップも飛ぶ改選期  
ゴシップと思えど何か気にかかり  
ゴシップも気にせぬ程に腹が出来  
ゴシップが崇り隣りと物言わす  
ゴシップにされて下積み世に知  
わくれてる女房噂へ世間体  
隣組議事よりゴシップはすんどり  
ゴシップだ言わして置けと気が  
社説よりゴシップ欄が親しまれ

## 和気川柳会 (岡山県) 藤原秋月報

新婚と知り長尻も腰を上げ  
上へ上へと贅沢が描く空想  
久しぶり出所の視野はみな新た  
久しぶり会つて悲運をきかされる  
血税を贅沢予算をきかされる  
三十をすぎて初婚を疑がわれ  
初婚から変らぬ愛で共白髪  
シクラメン日向にむいて春を待つ  
親の気も知らず娘は品を決め  
贅沢な旅をもんべの母送り  
よく機転利く娘にあった片えくぼ  
久しぶり笑顔と笑顔がものを言  
旅疲れ妻が機転の風呂が待ち  
孤独な日さりとて人を恋うでなし  
勝名乗りあげられません翼の中  
初婚には申し訳れない子が二人  
野良犬の機転犬取り無事にまさ  
死に後へ初婚の人が来るうわさ  
戸籍面無疵初婚で押しとおす

峯園 魔花麗 浮葉子 カロ女 柳葉 エス子 浅太 泉水 萬里歩 雪女 快夢起 秋風 胡風 三六 秋月 文平 あきら 笹花舟 篠花子 義明 久米雄 白水友 不白朽 千代香 左馬 凡曙 石花

贅沢になれて病気がつきまとい  
押し入れの機転をきかすせき払い  
酒買いにやればスルメも買える  
三十の初婚は何もかもまかし  
四十で初婚と言えば疑がわれ  
小野田川柳同好会 花田羊歳報

役目がら税のいやみも聞いておき  
下戸いつか役目の酒で手が上がり  
嫌われつつ役目集金して回り  
梅はしを食べない顔を酔はくさせ  
梅一輪なやめる人の部屋に生き  
珍客にされて紅梅鑑賞し  
梅干をほしがる妻の座が堅い  
梅だけでよいと寝た風邪は食い  
愛情のテストされてるいい男  
男気を出して飲屋のツケが増え  
立志伝男に仕上げた母の愛  
赤い下駄喜び見せに来るまんて  
田舎道下駄をとられた水だまり

哲一 清一 芳一 笙月 香 仙 涼 千 花 浪 休 空 雪 昌 氷 保 水 丘 道 弘 引 道 春 水 純 新 素 半 胡 涼 千 花 仙

黄銅六角ボルトナット  
及び特殊換物全般

## 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 06 3452-114  
夜間 06 4400 八





— 61 —



冗談が出て付き添いも気がほぐれ  
市場籠さげて苦笑の物価高  
苦笑するわけにも行かず煙草の輪  
落選の握手苦笑の顔で受け  
憎めない人柄苦笑して済ませ  
質問のめがはすれた苦笑い  
ふるさにと似合う山あり川があり  
成人式背広が似合う子を見上げ  
不似合も問題でない夫婦仲  
似合も似合わなくても夫婦仲  
主婦の座を守りエプロンも似合  
スタイルが良いらしい合つておど  
飯縫で女似合うかまだ迷い  
流水と鳴枕あゝ世で句をひねり  
せき止める術なく流水惜まれて  
河瀬にも今は無き友偲ぶ声  
冗談にもまれて石の角がとれ  
冗談を本当にして腹を立て  
流水のきちようめんさに鞭うたれ

### あすなる川柳会 (大阪市)

白い手に触れて熱さをふと感じ  
暗なるほどと言う名案に影の智慧  
暗がりへ来れば影まで怖くなり  
草餅に添えて彼岸の花便り  
ふり返す寒さに愚痴の出る彼岸  
逃げるのを追いかけるから図ら  
逃げるならいっそ月なと火星なと  
逃げた男の顔のどこか抜け  
まださめぬ怒りを肚にもつ返事  
月一つ夜汽車の窓につけてくる

### 富柳会 (富田林市)

じんわりと大阪弁でやいてくる  
主人のやきもち外に二号もち  
ていねいな言葉の話にある嫉妬

|                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 弘布佳寿律信貴瑞千素武乱代一勇八双松 | 朗堂女雄子枝美子枝翁鵬夫坊男保峰系築司 |
| 美林 きはち             | 梅里 素福恵百弓双諄          |
| 代松                 | 里 郎郎子酒彦彦一           |

クリスチャン神に嫉妬は見られ  
お遊び用の薬があるとは知ら  
この失敗薬にせよと老父の笑み  
薬石効なく女生れた丙午  
辛抱へ娘がはれて母ほれて  
永うない辛抱やと里の母  
調停に欲求不満手こずらせ  
欲望も出世も捨てて恋に生き  
小さな欲望魚一匹くわえて来  
欲望に疲かれ人生にも疲かれ  
人間に欲望があり星を見る  
たけはら川柳会 (竹原市)

### 静水報

大すぎな兄ちゃんもう卒業  
サイン帳きたない字だが書いて  
サちゃんマンガテレビは一語に見  
自転車を買ってもらったよう乗  
見たす野山の色が変わっている  
合格の通知持つ手がふるえて来  
釣り竿も折って魚は二匹きり  
0点の味は知らない隣の子  
(以上小、中、高校生)

|         |        |
|---------|--------|
| 宏重八好八重宏 | 子子子子子子 |
| 花柳      | 柳梢     |
| 白       | 柳      |
| 紅       | 柳      |
| 美       | 柳      |
| 吉       | 柳      |
| 太       | 柳      |
| 郎       | 柳      |
| 房       | 柳      |
| 月       | 柳      |
| 重       | 柳      |
| 子       | 柳      |

### かがみ川柳社 (岡山県) 池田古心報

対立の名残り双松にらみ合い  
沈黙の対立凄みある空気  
雑談の中にも対立意識もち  
神代から保守革新があつてもめ  
対立も一夜でケロリとする夫婦  
対立に明日なき友と気がつかず  
対立の仲に子供が這うて来る  
対立の家の子同士恋に落ち  
出稼ぎに人手を取られ悲鳴あげ  
手不足に祝の膳が待たされる  
滑って滑って思わす声を出し  
滑るより転ぶかまが先に出来  
正しく賞めれば屑屋で居て居り  
末っ子を孫と云われた男で居  
て居る人へ無言で酌いでやり  
後添を迎える父が今日はてれ

### オーエスケー川柳会 (大阪市)

赤電話で呼んでともかく喫茶店  
受送器取る内容聞かれる社長室

|       |       |     |     |       |      |    |
|-------|-------|-----|-----|-------|------|----|
| 元入 二仙 | 水子 火雨 | 静静静 | 千代子 | 茶鬼凡俊不 | 房健動枝 | 清不 |
| 形水報   | 水子    | 静静静 | 千代子 | 茶鬼凡俊不 | 房健動枝 | 清不 |

憲千八俊喜  
坊甲子重代  
報

形久一義忠有重真智敏広真誠豐正勝仙順義健重豐洋清亞盆清正裕  
水七郎一一一広彦也彦助人山 豐美夢造一坊則博兒入成土美典子

繁濁芳生多柳  
 子水 仏幸生

仙報  
 五南千柳武房マ松の勝喜が春  
 牛壽壽克武房マ松の勝喜が春  
 峰史剛己子男坊波る子恵坊

幸報  
 一多た好三加美暉文  
 骨光佳け志光光咲風女

— 63 —



・九輪水煙・

路郎忌も近づいて来てます  
ますす忙しくなってくると思  
うので同人諸氏の御協力  
をお願いしたい。

このところ句会へ出席す  
ることが多いので編集部へ  
も御無沙汰勝ちであるが、  
一三夫さんが切切って企画  
されるので雑誌の評判がだ  
んだんよくなってくるのは  
有難い。

路郎忌がすむと川柳塔の  
一周年記念である。それが  
すむと新年号と、ことしの

後半は忙しい。(清水白柳)

・ 2 D K ・

★最近の各柳誌をみてい  
ると、ひじょうに活気をお  
びてきたようである。とくに  
関西柳界の動きは目をみは  
らせるものがあつて、編集  
スタッフを強化したところさ  
えある。これはいい現象だ  
と思う。

★うちも早く増ページをし  
たいが、それにはやはり発  
行部数をふやすことが先決  
問題である。

・ 募 集 ・

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 菊沢小松園選  
課題吟 (各題10句以内)

「表紙」 久家代仕男選  
「かげ口」 藤井明朗選  
「男」 小西無鬼選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま  
す。  
★用紙はなるべく柳箋をご用ください。

会 社 五 月 句 本

日時 五月六日(金)午後六時  
会場 自安寺(妙見さん)  
市電千日前下車スグ北側  
(電話211・1478番)

兼題

柳話  
「デラックス」  
「不器用」  
「動物園」  
「深い」

席題

三題(題と選者は当日発表)  
各題三句  
会費 百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

吉田圭井 選  
西田柳宏子 選  
森下愛論 選  
戸田古方 選  
川村好郎 選

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 菊沢小松園選  
課題吟 (各題10句以内)

「ギター」 奥谷弘朗選  
「身許」 大坂形水選  
「汗」 臼井三林坊選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。  
文字は楷書で新かなづかいにしてくだ  
さい。

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪(271) 3985番

6月の「線」「マイ・ベース」  
兼題「架空」「先取り」

★柳誌の発行部数というものは、その投  
句者数をX倍すると、およその発行部数  
がわかるのである。だから、いくら強が  
りをいってもはじまらないのだ。  
★同人諸氏が、一人ずつふやしてくださ  
ると、増ページなんか朝めし前だが、一  
人ふやすということはなかなかむずかし  
いことである。  
☆BK台本研究會出身の作家が、名古屋  
へ出演する芸能人のために本を書くこと  
になり、秋田実先生が大須のある料亭で  
記者会見をされた。その日、末席を汚が  
していたボクに「川柳と漫才の共通性」  
という質問があった。ときどきこういう  
ことをきかれるのだが、川柳と漫才は兄  
弟分のように思っている人が相当多いよ  
うである。  
(不二田一三夫)



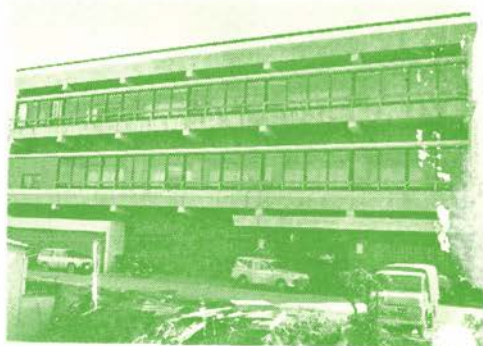
国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎

国際観光旅館

うおまたろ  
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4



風光明媚な  
海岸美を  
誇る

川柳の味わい方・五百数十句

麻生路郎著 新川柳鑑賞

定価 250円・送料 80円  
B 6 版・250 円

麻生路郎先生指導

川柳塔婦人友の会・会員募集

申込所・大阪市南区二ツ井町23

山 川 何 著

GOLDEN  
O.S.K

の紳士服

スマートで  
着心地のよい



株式会社  
オーエスケー

定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料七円)

一年分 千四百四十円 (送料七円)

昭和四十二年四月二十五日開始

昭和四十二年五月一日発行

文芸春秋社発行所・東京

大阪府大阪市南区二ツ井町23

大陽印刷株式会社

大阪府大阪市南区二ツ井町23

川柳塔社

電話大阪・二七一一九八番  
掛紙は別紙



黒潮おどる

# 紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行第2きのくに……………(毎日)……………12時45分発  
 急行南紀3号……………(毎日)……………16時40分発  
 急行臨時しらぼま……………(土曜)……………13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行南紀1号……………(毎日)……………7時45分発  
 夜行直通列車……………(毎日)……………22時07分発  
 ●第2きのくに号は特等指定券を1週間前から発売  
 ●他の列車は特等整理券をなんば駅で発売します

お問合せ・南海交通社  
 (641)8888・(341)5039  
 (361)3126・(716)8861

**南海電車**

料理も電話も

# 551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

# 豚饅 蓬萊 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店  
 天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー